

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2014年1月1日初版 第16号

<http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい

明けまして
おめでとう
ございます

本年もよろしく

お願い申し上げます

二〇一四年 元旦

もぐら通信編集部

岡田裕志

岩田英哉

岡 篤史



目次

- 1。新年のあいさつ...page 1
- 2。目次...page 2
- 3。ニュース&記録...page 3
- 4。安部公房の新発見テキスト3件：編集部...page 8
- 5。安部公房のエッセイ2つの初出が判明：編集部...page 9
- 6。安部公房の「孤独」と「文学」の力...雑感：稲垣 健...page 10
- 7。私の読書遍歴：wlallen...page 15
- 8。滝口さんと編集部との往復信...page 18
- 9。2013年・安部公房の重要ニュース...page 28
- 10。2013年・もぐら通信の重要ニュース...page 29
- 11。KAP読書会報告『密会』
 - (1) 読書会報告：wlallen...page 30
 - (2) ブリーフィング資料：wlallen...page 32
 - (3) 卒業論文の要約：嵐 志保...page 34
- 12。私の本棚より『アサヒグラフ』昭和29年9月26日号：岡田裕志...page 37
- 13。質問箱：日本共産党除名の日...page 39
- 14。安部公房の変形能力14：安部ヨリミ：岩田英哉...page 41
- 15。もぐら感覚18：部屋：タクランケ...page 53
- 16。前号の訂正...page 72
- 17。読者からの感想...page 73
- 18。合評会...page 75
- 19。本誌の主な献呈送付先...page 75
- 20。もぐら通信の収蔵機関...page 75
- 21。個人情報保護方針...page 75
- 22。編集方針...page 75
- 23。バックナンバー...page 75
- 24。編集者短信...page 76
- 25。編集後記...page 77
- 26。次号予告...page 77
- 27。「もぐら通信」総目次：創刊号～第15号...page 78～84

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

ニュース & 記録

安部公房が共産党を除名された年月日が特定されました

編集部が日本共産党中央委員会に、安部公房の除名された日付を電子メールにて照会したところ、同委員会より回答があり、安部公房の除名された日付は、1961年9月6日と特定されました。このやりとりは、本号の質問箱をご覧ください。

この後引き続き、編集部は、安部公房が入党した日付と推薦者を照会中です。日本共産党中央委員会より回答があり次第、また読者にはお知らせ致します。

安部公房に関する最新ニュースのデータベースを開設しました

「もぐら通信:ニュース&記録」というデータベースを開設しました。

<http://w.livedoor.jp/w6allen/>

にて、最新の安部公房ニュースが読めますので、是非アクセスしてみてください。順次最新のニュースをここに掲示し、集積して行く予定です。（ご注意:運営会社の都合で、1/15にURLが変更される予定ですが、自動的に新しいURLへと誘導されるようになっております。）

取り壊される、安部公房『砂の女』の生まれた家

京王線仙川駅にある安部公房の家が既に売却され、この冬に取り壊されることになりました。そのことを報じる記事です。安部公房ファンにとっては、誠に残念なことです。

<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20131227-00010000-shincho-soci>

仙川駅南口下車、徒歩10分程の距離にあります。桐朋学園大学を左にみて歩き、武者小路実篤公園の近くです。住所は、調布市若葉町1-22-10。取り壊される前に一度訪ねては如何でしょうか。

「安部公房の書齋」が『考える人』に掲載されました

安部公房が35歳で新築し、以来20年間あまりを過ごした調布市の仙川の家がこの冬、取り壊されることになりました。新潮社の季刊誌『考える人』(2014年 冬号)に、「安部公房の書齋」と題した記事が掲載されています。まず、書齋などの写真が載っていて、その中に実際に家の中を見られた加藤弘一氏のエッセイ「濃密な気配」があります。もう見ることの出来ない写真は大変貴重です。エッセイを読むと、まだまだ沢山の資料類が残されていたことがわかります。「安部公房展があと二回か三回開けるだけの遺品があったが、最大の遺品はこの家なのかもしれない。」と締められています。

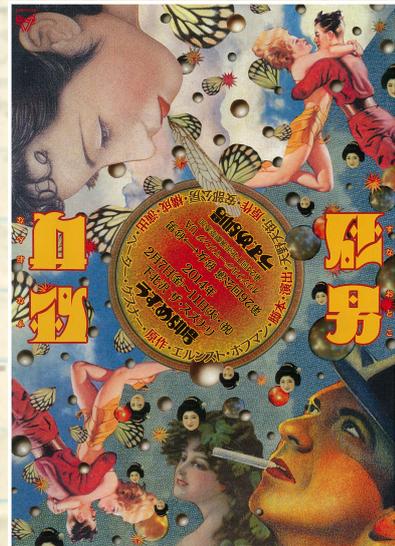
『郷土誌あさひかわ』から『安部公房を語る』が発刊されました

渡辺三子さんの発行する『郷土誌あさひかわ』より、この20年間の同誌への、安部公房に関する延べ100余名の方からの寄稿文を集成した読み応えのある一冊が、『安部公房を語る』と題して発行されました。実に貴重な資料です。表紙絵は、安部公房と親交のあった桂川寛画伯、序文は、鳥羽 耕史氏(早稲田大学教授)。総計212ページ。限定300冊。価格は、消費税(150円)、送料(350円)込みの3500円です。書店での流通はありません。是非ご購入下さい。注文先は、郷土誌あさひかわ、渡辺三子さん宛。ファックス番号:0166-23-1100、電話番号:0166-22-2226まで。(ファックスは、このもぐら通信を編集している時点で故障をしております。ファックスが通じなければ、お電話をお願いします。)



うずめ劇場公演「砂男←→砂女」への無料ご招待のお知らせ

うずめ劇場が2月に上演予定の「砂男←→砂女」に、プロジェクトメンバーの荒井孝彦さん個人からもぐら通信の読者への無料招待チケット提供のお知らせです。ご招待をご希望でしたら2014年1月31日までに arainobita@gmail.com 宛荒井さんまで、「お名前」「指定公演」「指定日時」「一般か学生か」「招待券枚数」「パソコンからのメール連絡が受信可能なアドレス」「招待チケットの送付先住所」をお知らせください。チケットの枚数に限度があり既定枚数に達しましたら、お断りする場合がございますのでご了承ください。ご来場をお待ちしております。詳しい公演内容はチラシもしくは劇団HP:<http://test.uzumenet.com> でご確認ください。



神奈川近代文学館で安部公房を含む展示があります

神奈川近代文学館では、常設展「文学の森へ 神奈川と作家たち」展の第3部として「太宰治、三島由紀夫から現代まで」(安部公房含む)を2014年2月1日～4月4日まで(月曜休館)展示します。<http://www.kanabun.or.jp/0a33.html>

ヤマザキマリさんの『男性論』に安部公房に対する思いも

ヤマザキマリさんの新刊『男性論 ECCE HOMO』（2013/12 文春新書）に、ハドリアヌス、プリニウス、ラファエロ、ステイブ・ジョブズなどと並んで安部公房に対する思いも書き記されています。

鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』（2013/12 森話社）の目次

記録と検索に資するため、目次内容を記します。

《Ⅰ 総論》

メディアの越境者としての安部公房＝鳥羽耕史

〈社会理論〉としての安部公房＝リチャード・カリチマン

《Ⅱ 戯曲・スペクタクル・パフォーマンス》

幽霊と珍獣のスペクタクル＝日高昭二

死者との同化からマルクスの幽霊へ＝木村陽子

安部演劇の可能性と限界＝高橋信良

『未必の故意』序説＝マーガレット・キー

俳優座から安部公房スタジオへ＝井川比佐志インタビュー

アヴァンギャルディストの顔＝佐藤正文

《Ⅲ 映像と他ジャンルへの越境》

〈砂〉の闘争、〈砂〉の記録＝森山直人

電子メディア時代における異化＝永野宏志

ラジオドラマ『耳』『棒になった男』『赤い繭』＝守安敏久

実在と非実在の間の空間における探求＝コーチ・ジャンルーカ

メディア実験と他者の声＝鳥羽耕史

安部公房と日本万国博覧会＝友田義行

《エッセイ・劇評》

「快速船」の演出について＝倉橋健
共同幻想を裁く眼＝大島勉

安部公房年表＝友田義行



安部公房全集の新発見テキスト3件

編集部

安部公房全集に収録されていない3つのテキストが、岩崎努さんにより発見されました。

一つ目は、「アサヒカメラ」（1963年7月号、同誌184ページ）に掲載されている『わが町一調布』と題した文章で、安部公房の撮影した調布の写真とともに掲載されています。

この記事によれば、安部公房の使用したカメラは、ペトリーフ7・ペトリ28ミリF2.8・露出EEです。

文章の内容は、甲州街道に沿って散策した折に、安部公房の住むこの町、この地域の見せる昔の姿に言及し、昔の姿を今の感覚で写真撮影する気持ちを書いたものです。この雑誌の読者はカメラ愛好家であることから、光線の微妙な具合やら、EEカメラの感度のよさやら、近景と遠景の関係やら、安部公房のカメラ好きのこころの横溢する文章となっています。

二つ目は、「週刊朝日」（1965年、2月26日号）に掲載された『強烈な現実愛が生む混沌 ヘンリー・ミラー著『ネクサス』他』という題の書評です。

集英社が出した世界文学全集第6巻にヘンリー・ミラーの『ネクサス』を含む巻があり、それを、安部公房が書評したものです。

このアメリカの作家の一行一行には音楽があり、無限のドラマがあると論じ、その様を異様な混沌と呼んでいます。そうして、その混沌の理由をこの作家の優しさに求め、その過剰な現実を愛するこころと、同時に救済を、従って絶望をも拒絶するそのこころの両立を論じ、その勇気を褒めております。

三つ目は、師石川淳の著作『あらたま』（新潮社刊）の帯に書いた安部公房の推薦文です。

この作品の持つ毒を宝石に譬（たと）え、その魅惑を現代の神話と呼んでいます。



安部公房のエッセイ 2 つの初出が判明

編集部

安部公房の書いたエッセイ 2 つの初出の雑誌が判明しました。

これも岩崎努さんの調査により、安部公房の書いた次の作品二つの初出の雑誌が明らかになりました。

- 1。仮説・冬眠型結晶模様
- 2。授乳するマリア

1は、安部公房全集第7巻、77ページに収録

2は、安部公房全集第7巻、84ページに収録

『仮説・冬眠型結晶模様』は、原題が『冬眠型結晶模様』と題して、『リビングデザイン』（昭和31年10月1日発行）の第22号、1956年10月号に、『授乳するマリア』の初出は、『リビングデザイン』（昭和32年1月1日発行）の第25号、1957年1月号に、それぞれ掲載されていることが発見されました。



安部公房の「孤独」と「文学の力」・・・雑感

稲垣 健

ぼくは安部公房の作品を読み終えた後、ほとんどといっていいほど、遺棄された死体のような、虚ろで、やりきれない孤独感に陥る。そして、それだけに終わらないなにかが残る。これは、なんなのだろうと考えた。いくつかの作品を読み返して、「あ、これは！」と思った。「力」だと。そこで、まず代表作の終わりの部分を抜粋して、振り返ってみよう。

『第四間氷期』

コンピュータによる周到に集積されたデータの解析から導き出された未来の地球の姿は水没した世界だった。その世界で水中生活をする鰓のある子どもたちの中で、地上の風の夢を見た少年は、ひとりはぐれ、水上を目指し、島に上陸する。そして、涙しながら、風の声に満たされて、もはや水に戻ろうともせず、静かに息絶える。

「しかし、待望の風は吹いていた。とりわけ風が眼を洗い、それにこたえるように、何かが内側からにじみだしてくる。彼は満足した。どうやら、それが涙であり、地上病だったらしいと気づいたが、・・・もう動く気はしなかった。 / そして間もなく、息絶えた。さらに、何十昼夜かが繰返され、海はその小島をも飲み込んだ。死んだ少年は、波に浮んで、どこまでも流されつづけた。」

『砂の女』

あれほど脱出を試みた砂の蟻地獄になんということはない、だらしなく上から縄梯子がぶら下がっている。脱出を試みながらも、無言の求心力をもった女との乾いた関係をもち続けた日々もなにもかも、そこになかったような空虚感に襲われる男。

「家の中では、乾いた声で、ラジオが何やら歌っている。泣きじゃくりそうになるのを、かろうじてこらえ、桶のなかの水に手をひたした。水は、切れるように冷たかった。そのまま、うずくまって、身じろぎしようとしなかった。」

『他人の顔』

己の内部に完璧な物語を築いたはずの男は、妻の外部からの一撃でその物語は一挙に崩され、そして、実にくだらぬ行為に身を賭そうとする。最後に外部に晒された爛れた顔の男の悲しいまでの他者を見失った生の痙攣の結末。

「足音が近づいてくる・・・だが、この先は、もう決して書かれたりすることはないだろう。書くという行為は、たぶん、何事も起らなかった場合だけに必要なことなのである。」

『箱男』

もはや内部から脱することが不可能となった男の留まることのないつづきやきは、ますます己の内部の迷路に絡めとられていく。そして、カミュの『異邦人』の最後のサイレン・・・そう、独房のムルソーが幸福を感じる世界の開示を予感させるあのサイレンでなく、外部で唐突にけたたましく近付き、遠ざかっていく救急車のサイレンが逃げ場のない閉塞感をさらに委縮、収斂させる。

「じっさい箱というやつは、見掛けはまったく単純なただの直方体にすぎないが、いったん内側から眺めると、百の知恵の輪をつなぎ合わせたような迷路なのだ。もがけば、もがくほど、箱は体から生え出たもう一枚の外皮のように、その迷路に新しい節をつくって、ますます中の仕組みをもつれさせてしまう。・・・救急車のサイレンが聞えてきた。」

『燃えつきた地図』

白紙化した風景を前に、たじろぐように、身を引き、そして、たったひとり

電話ボックスで大便をする男の孤独に身震いし、轢き殺されたペラペラの猫の死骸に名をつけようと、空虚に腫れあがった笑みを浮かべる。

「町は、空間的には、まぎれもなく存在していたが、時間的には、なんら真空と変わらない。存在しているのに、存在していないというのは、なんという恐ろしいことだろう。 / これはよほど長いあいだ耐えていた大便に相違ない。公衆電話の中で、用を足さなければならぬほど、大便を耐えつづけなければならなかった男・・・この都会という無限の迷路の中で、数えきれないほど存在しているはずの便器の中の、わずか一つの利用さえも許されなかった、孤独な男・・・その男が、公衆電話のボックスの中に、かがみ込んでいる姿勢を想像すると、ぼくは恐ろしくなってしまったのだ。 / 見ると轢きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸を、大型トラックまでがよけて通ろうとしているのだった。無意識のうちに、ぼくはその薄っぺらな猫のために、名前をつけてやろうとし、すると、久しぶりに、贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる。」

『方舟さくら丸』

「もぐら」と自嘲的に自称する醜い男が選んだ者だけが生き残るための王国には、結局は選ばれざる者たち、ただ生き残ろうとする者たちが残ることになる。「もぐら」は最後に王国を完全に外部と遮断し、ひとり外に脱出する。ところが外の街は、すでに中性子爆弾が炸裂した後のように、存在するが透けて見え、自分も透明となって、ひとりカメラを首からぶら下げて佇む。

「透けた人間の向こうは、やはり透明な街だ。ぼくもあんなふうに透明なのだろうか。顔のまえに手をひろげてみた。手を透して街が見えた。・・・街ぜんたいが生き生きと死んでいた。誰が生きのびられるのか、誰が生きのびるのか、ぼくはもう考えるのを止めることにした。」

このように安部公房の作品の終わりには、救いようのない孤独が横たわる。

そして、喪失感、遺棄された死体の孤独感。安部公房のこうした孤独感の極めつけは、『密会』だ。

この作品では、記号化された欲求が欲望（性欲）としてただ消費されつつ、同時に、性も生も周到に管理された世界を見事に、シニカルに描かれている。（ここでの管理機能の中核をなしているのは、監視者が不在でも監視が機能する盗聴システムであり、これはミッシェル・フーコーが取り上げるパノプティコンのようだ。）管理する側、管理される側も、いびつ化した生を表現するような畸形が氾濫し、M-73F（主人公）は、まさに性欲の祝祭の只中で、骨が溶けて人間の原型をとどめない少女と逃走する。地下の迷路を迷走し、とうとう食べるものも尽き果て、最後に盗聴器に向かって「自分は病気です。いい患者になります！」と叫ぶ……。叫ぶ相手は、自分の妻であるかもしれない仮面女と公衆の面前で交合する「馬」だ。

「ぼくは盗聴器に向って、恥も外聞もなくわめき始めていた。呼び掛ける相手は馬だった。自分が病気であることを認め、申し分のない患者になることを、あらん限りの声で訴えつづけた。……。いくら認めないつもりでも、明日の新聞に先を越され、ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に死につづける。やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」

ぼくはこれまで読んできた文学作品の中で、これほど胸が締めつけられるような孤独感を感じたことはない。この胸苦しいまでのやるせない孤独感。

これは絶望感か？敗北感か？

ここに挙げた安部公房の代表作の結末には、ハッピーエンドも、悲惨な終末も、説教じみたご高説も、カタルシスもなにもない。

ただただ「宙づり」にされた状態のやるせなさがあるだけだ。

安部公房は、偶像、儀式化を嫌ってきた。これらはニーチェのいう「生きるための真理」かもしれない。同時にニーチェは「それは生を硬化させる」と指弾するが、安部公房も同様の考えをもっていたのではないか。

現状を肯定し、「皆同じなんだなあ」と安心させる作品。敵と味方を明確に二分し、悪である敵にギリギリまでやりこまれ、最後は自分が勝つ。正義が勝つという作品。世界中であふれているこうした作品は、読者たちを安心して現状肯定させ、あるいは、ひとつの思想に酔い痴れさせ、かくして、彼らは本を

閉じ、再び日常の歯車に身をおく。

それに対して、安部公房の作品は、むしろこうした「安心」を悉く読者から剥がし去る。そして、日常の歯車をバラバラにする。まさに「世界の関節を脱臼させる」。とりのこされた読者は、関節が外れた世界の前に佇み、茫然とする。そして、ふと空を仰ぐ。「これが生きていることか」とつぶやき、新たな世界の関節を組み直す力が身のうちに高まってくるのを感じる。もちろん、この「宙づり状態」が耐えられなく、作品を床に叩きつける読者もいるだろう。

ぼくは、これが「文学の力」だと思う。

文学とは凶暴で、残酷で、しかし、また、生の痛みを泣きじゃくる子どもをそっと抱きしめてくれる・・・力そのものだ。

安部公房の作品は、「文学の力」そのものだ。



私の読書遍歴 ～編集者短信拡大版～

wlallen

今回は、あまり安部公房が出てこない話ですが、最後までお付き合い願えれば幸いです。

振り返ると、あまり本を読まない子供だったと思います。しかし、小学5・6年生の担任の先生が、始業前に本を読みましようと呼びかけがあったのです。その先生は、アコーディオンを弾いたりして非常に個性的で、学級新聞もほぼ毎日発行され、熱心な方でした。土曜日の半ドン（午前中のみの意）の授業の後は、「肉なしカレーうどん」を頼むことで有名で人気でした。いつしか、生徒の中で、読書ブームができて、私もそれにつられて、本を読むようになりました。ショートショートの星新一や「三毛猫ホームズ」シリーズの赤川次郎などが人気でしたね。中学校に入ると、高校受験のため進学塾に通うようになり、本をあまり読まなくなりました。ちなみに、小学校の頃は、ファミコンをしていましたが、中学三年生から、受験に集中するため、ほとんどテレビゲームをしなくなりました。今から10年位前、ニンテンドーDSの脳トレブームで、またテレビゲームをするようになりました。

高校に入ると、電車の通学時間や学校の休憩時間を使って、また本を読むようになりました。さらに、本好きの友達がいたのも大きいですね。ちなみに、彼は今ある大学の文学部で教鞭をとっています。私は、夏目漱石、芥川龍之介、武者小路実篤、有島武郎などの明治・大正文学を主に読んでいました。昭和文学といっても、川端康成くらいでしょうか。その時は、現代文学は眼中になかったですね。ただ、その友達から、安部公房は「あべこうぼう」と読むのだよと教えてもらいました。

大学に入って、ある事件がありました。いや、犯人は私なのですが(笑)。囲碁部の先輩と文学の話をして、「SFは人間を描けないから駄目だ。純文学こそ、文学の王道だ。」と喧嘩を売る発言をしてしまいました。しかも、先輩がSF好きなのを知った上での発言でした。先輩は、「SFでも人間は描ける。」そんな反論をされたと思います。議論したものの、最終的にはぐうの音も出なかった私は、「純文学など、そもそも存在しないのではないか？」と思うようになりました。今から思うと、その先輩がいなければ、「第四間氷期」は読ま

なかったかもしれません。その先輩は、旭川出身で、安部公房も好きとのことでした。囲碁が強くて全然敵いませんでした。子供の頃、山下敬吾と対局したこともあるそうです。

閑話休題、その後、私の読書範囲は広がり、村上春樹や吉本ばなな、果てはノンフィクションの立花隆まで読むようになりました。それまでが草食動物だったとすると、雑食動物になったわけですね。

そんな中、「新潮文庫の100冊」を読破しようと思いました。結局は25冊程度で終わりましたが、良い体験でした。その中で、「砂の女」にたどり着き、新種の小説に出会えたと思った私は、逆に安部公房の罠にはまってしまうことになります。

「壁」「箱男」「第四間氷期」などの名作・傑作群に触れ、新潮文庫の安部作品をほとんど読んでしまいました。気付けば、迷宮のような安部の小説世界から抜け出せなくなりました。箱を脱げなくなった箱男のように、便器にはまったもぐらのように、そこから全集を読むのは、ごく自然で当たり前の事でした。026から揃えていったのですが、金銭的な面でなかなか揃えることができませんでした。県立図書館などから借りたりして、不足分を補っていました。最近になって、やっと全巻揃えることができました。しかし、新刊で購入したのは、数巻程度です。すいません、新潮社さん。

他に好きな作家というと、繰り返し私が挙げている「1984年」を書いたジョージ＝オーウェルです。反共の作家だけではありません。普遍的な巨大管理国家の恐怖を一早く見抜いた預言者でした。現実が後追いついた例として、最近のアメリカ政府による盗聴、Baidu IMEによる文字列情報の取得など、数え上げたらきりがありません。

アーサー・C・クラークも好きです。「2001年宇宙の旅」（何故か、年号が続きますが）は、映画と対をなす傑作です。木星や土星に我々がたどり着いたとき、また新たな感動が待っていることでしょう。

筒井康隆も好きです。「文学部唯野教授」は、抱腹絶倒の小説批評小説でした。「虚人たち」も好きです。そこに、「密会」を思わせる作品が出てきます。

村上春樹の「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」には、衝撃を受けました。これだけ平易な文体で、しっかりとした物語を描く力量は、並々ならぬものがあります。

逆に、読んだけれど、さっぱり訳のわからないものとして、ガルシア＝マルケスの「百年の孤独」（安部があんなに激賞していたというのに！）とカート・ボネガットの「タイタンの妖女」（爆笑問題の太田光が絶賛されてました）があります。再チャレンジしなければと思っています。

さて、安部公房に話を戻すと、彼の小説に何故惹かれるのかを考えると、「小説の終わりで、やっと始まる物語」を描いているから面白いのだと私は思います。

例えば、「砂の女」で、穴から脱出した男は、それからどうしたのか？

「他人の顔」で、拳銃を手にした男は、それからどうしたのか？

「燃えつきた地図」で、猫の死骸に名前をつけようとする男は、それからどうしたのか？

考え出すと、きりがありません。そこが本当に面白いですね。安部の小説の醍醐味と言えるでしょう。やはり、私は迷宮から抜け出せないようです。一生彷徨うほかないようです。

(了)

ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。

次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

滝口さんとの往復信

編集部

第11号についての往復信

お礼と感想
[岩田英哉]

滝口さんの『「安部公房の本」との出会い』を読んで、

ひとがその作家が好きだとか、影響を受けたとか、そういうときには、本当のその意味は、そのひとの人生に、即ち生き方に影響を与えたという意味ですし、影響を与え、影響を受けたという意味は、その人の人生がその瞬間から変質したという、そういう意味でなければなりませんし、その筈です。

滝口さんにとっての安部公房は、まさしくそのような作家であることが、とてもよく判る、率直で、素晴らしい散文でした。

わたしの場合には、安部公房は、わたしの好きな作家の一人ですが、わたしの人生を変えたわけでは、ありません。なるほど、わたしの人生は間違っていなかったのだという確信を与えてくれる作家なのです。

滝口健一郎様

「変質」ですか〜なるほど…

安部公房がここまでわたしのなかで生き残り、かつ、重要であったという事実！

それに気づかせてくれたのは「もぐら通信」さんです！

なるほど。

わたしにとっての、滝口さんの安部公房は、トーマス・マンというドイツの作家です。この作家の小説を読んで、わたしの人生は明瞭に変質し、変わり、誰にも理解されない領域に、わたしは足を踏み入れました。

そうやって、長い長い、トーマス・マンの影響下の、文學遍歴の後、高校生の時代から好きで読んだ安部公房の諸作品を全集で読み返すと、この作家が何を言っているのかが、掌を指すように、わたしにはよくわかるようになっておりました。実に不思議なことです。

トーマス・マンと安部公房は実によく似ておりますし、その精神のあり方、ものの考え方は、言語が異なりますが、双子のように実によく似ております。

トーマス・マンは、少年愛を心に抱く芸術家でしたが、10代の安部公房の友人宛の書簡を読むと、同級か、その辺りの美しい少年（高谷さん）に愛を覚えているのがわかります。

この同性愛ばかりではなく、その他の点でも、両者はとても近しく、わたしの中では一つに結ばれております。

高2の時『ベニスに死す』は読みました 映画の原作本ということで 映画では主人公は作曲家ですが、原作は作家なのですね

『魔の山』は、当時気になっていた作品です。

全集を全部読むというのは快挙ですね！わたしは、全集＝3～4冊分ほどしか安部言語を読んでいないのはいかな… 読まなければ！！

そうですか…似ていますか…気になります 2人は似ているんですね！

にているんですね…

トーマス・マン作品のお勧めはなにかありますでしょうか？

と、このように書いて来ると、自分のことばかりを書いてしまって、感想になりませんが、ご容赦下さい。

これも、それも、滝口さんの文章の余りの濃度の高さに、思わず思い出した、わたしの言葉をお伝えして、ご寄稿への感想と致します。

今後とも、ご寄稿を楽しみにしております。

[岡田裕志]

滝口様

いつも「もぐら通信」のことを気にかけていただき、有り難うございます。11号にも「安部公房の本」との出会いをご寄稿いただきました。厚くお礼を申し上げますとともに、感想を述べさせていただきます。

滝口さんのこの文は、一口で言うと、安部公房の作品との出会いを軸にした滝口さんの精神の息づかい、が感じられました。

中学三年の時、千日前で安部公房の著作を眼にした時から、高校で『安部公房全作品』に出会い、魅了されていく。安部公房スタジオの公演を観に夜行列車で上京するというすばらしい行

リルケ カネッティ マルケス カフカ…そして、マン 少しずつでも読んでいかなければ…と思います。興味深いお話ありがとうございます。

精神の息づかいですか…

動力！ それからはリアルタイムで安部公房作品に接し、『箱男』『密会』『方舟さくら丸』『カンガルー・ノート』そして遺作の『飛ぶ男』、と長い併走の時間を持たれます。その過程がリアリティを持って語られ、そこにはうらやましくも、充実した、滝口さんの精神の息づかいが感じられます。一つ一つの作品についての当時のご感想など、その表れでありましょう。そしてありがたいことに「もぐら通信」において、それらの蓄積されたABEワールドのイメージを展開していただくようになりました。

私はこのような、安部公房との出会いを読者の誰もが持っていると思い、その投稿を待っているのですが、滝口さんのこの文は、その好個の例となるように思いました。

これからもどうぞ安部公房作品の魅力を、滝口さんの息づかいを通して、語っていただきたいと思います。有り難うございました。

岡田「たとえ1行でも100人集まれば100行になりますものね」というお言葉が実現すれば、と思います。それを引き出すように努めなければなりませんね。

「もぐら通信」の存在は大きいです。安部公房はいつも身近にというか、体内にしじゅう飼っていた作家なのですが、ついつい慌ただしい日常のいそがしさにかまけ、忘れてしまうことがあるんです。

「もぐら通信」さんのお陰で、安部公房を忘れないで体内に飼いつづけられそうです。

そうですねえ、たとえ1行でも100人集まれば100行になりますものね。わたしも、もっと、いろんな人の中に生き続ける安部公房を読んでみたいです。

「安部公房世界」を共有するというのは、ホント素晴らしいことだと思います。

これからもお付き合いのほどよろしくおねがいします。

安部公房の好きな一節、たとえば各人好きな一節「やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」（わたしは好きです）とか…なんでもいから、安部公房について思い感じるどころの1行が集まれば楽しいですよ。

第13号についての往復信

お礼と感想

[岩田英哉]

滝口健一郎さんの『もぐら通信』
もうすっかり確立していると言ってよ
い、滝口さんの文体、滝口調でのエッ
セイには、いつも楽しいものを感じざ
るを得ません。たとえ、滝口さんが苦
しいことを書いていても、そうなので
す。

滝口さんの文章の幻想性が読者に何か
ある深い感じを与えるのです。

滝口さんは小説を書いてみたらよいの
かも知れません。それはきっと幻想小
説になることでしょう。

楽しいですかあ～
それは気づきませんでした。

幻想性ありますか…
最大の褒め言葉です…

幻想小説…いいですね
さらっと、書ければいいんでしょう
が…
キツイでしょうねえ
安部公房は小説書くのをロッククライ
ミングに例えてましたものねえ

もぐら通信と題して、考えるきっかけを提供してくれていると書いて下さって、ありがたく思っております。

ABEジャンキー、これも安部公房の愛読者の通称になるかも知れませんね。

今回のご寄稿、ありがとうございます。
次のご寄稿を楽しみにしております。

[岡篤史]

滝口健一郎様

タイトルに、当誌の名前を出してくれて光栄です。

「採石場跡のシェルターのなかに絵画は必要なかったのか？」というのは、絵画を描かれる滝口さんならではの鋭い視点だと思います。

〆切とか発表の場がないと、なかなか書く作業ってなおざりにしがちです。その点、

『もぐら通信』はありがたい存在ですが…

同時に、追い詰められます。

安部公房=どんどんぬかるみ沼に入り込んでいく恐怖感もあります。

『もぐら通信』さんのおかげで、より深くABEジャンキーの道を歩み出さざるを得なくなったのでは…と…これも少しコワイ。

これは、岩田さんが指摘されてますように「核シェルターの中の展覧会」の中で、インタビュー者が、美術作品が持ち込まれなかったことを指摘したことに関して安部公房が答えているので

安部の小説には、一筋縄ではいかない、様々な問いかけが描かれています。答えることよりも、まず、その問題を自分で考えてみるのが大事なのではないか？ 滝口さんも苦闘されているように思いました。

すが…

わたしの記憶のなかでは、絵画の資産価値についての見定めで、絵は必要なしとの安部氏の回答には納得したのですが…

病院に飾ってある（飾られるべき絵、といった方が適切か）絵は資産価値という側面を全くとっていいほど剥奪された絵画だと思うのです。

ですが、

その絵には不可思議な魔力が潜んでいるような気がしまして…

入院したものであれば納得すると思われませんが、病室に絵が1点あれば、食い入るように眺め、やがて絵の中にはいっていき…というような患者は魂の散歩をしはじめる…

やがて、みんなシェルターのなかで老死していき…

居住空間が病室のようになってきた時、なにかのはずみにまぎれこんでいた、誰が描いたかもしれない絵画がふっと価値を帯びてくる場面もあるかもしれないと…

日常のなかで、そういう「絵」のことが気になりだしたのです。

苦闘…まさにです

当誌を「重要な電子ブック」と賞賛の言葉を頂き、誠にありがとうございます。これからも質を保ち続けていきたいと思えます。

小誌へのご寄稿、本当にありがとうございました。

またのご寄稿、お待ちしております。

[岡田裕志]

滝口健一郎様

このたびは「もぐら通信」第13号にご寄稿をいただきましてありがとうございます。いつも変わりなく「もぐら通信」に原稿をいただきまして、とても心強く感じております。厚くお礼を申し上げますとともに、多少の感想を述べさせていただきます。

いつも安部公房についての思いと言葉をご寄稿くださっている滝口さん。今回もその思いがいくつかの言葉となって伝えられてきました。例の如く、私たちを癒し、考えさせてくれます。

『方舟さくら丸』の核シェルターに絵画は必要なかったのか、とかは興味深い視点ですね。絵画、音楽、文学などは人に必要なものでしょうか。私たちはことに意識しないのであるのが当然と

リアルタイムで発刊される安部公房＝電子書籍の似合う作家の「電子ブック」は魅力です。

タブレットで電車のなかでも新しい安部公房関係が読めるのはいいですね。

思ってしまう。けれども、なくても生活には困らないようにも思います。余裕のある文化的な精神には糧となるのでしょうか。

たしかに、なくても困らないのですが…病院にある「絵」のことが気になったものでシェルターという閉塞空間に密閉される＝入院を余儀なくされた患者のように、そこは、地下の巨大な病棟に見えてくるかもしれません。

精神が自由に散歩することのできる

「絵」は必要になってくるかもしれない。

目の前の現実の人間たちのなんやかやから逃避する願望、自由な空間に逃げ込むためにも。

「病院に在る「絵画」はなぜあんな風に不可思議な神秘的な扉を持っているのだろう。

絵の技法がたどたどしかったり、ぎこちなかったりすればするほど、不思議な魔力を発光するみたいな「絵画」。

それが、

風景画であったり、多分、架空の街並みなのかもしれないが…

入院したベッドの壁にその絵が在ったりすると…ただただ、ぼんやり見ているうちに、

やがて「絵」のなかに入っていく、

どんより曇った異国の街をとめどもなく歩き…曲がりくねった路地を入り、寒々とした石畳の街…夢のなかを歩いているような異人の人びとと出会い…

どンドン歩いていくと……

いつのまにか迷子になってしまうかもしれない

どこの誰が描いたかもしれぬ稚拙な技

。

『箱男』の構造をつきつめたい衝動、は魅力というよりも、魔力を感じてしまいます。そこから抜け出せなくなるような。私などはあえて近づかないようにしてしまいます。

でも、そのようなひらめきを生活の中で思考し続けておられるというのは尊い事だと思います。それは「安部公房的抽象思考」として言語化されていますがまさに「安部公房とともに生きる」ような営みですね。またその発表の場として「もぐら通信」を活用していただけるのは、誠に有難いと思います。

滝口さんは自ら「ABEジャンキー」と言っておられますが、まさに、です。ご寄稿ありがとうございました。

法で描かれた病院に在る「絵画」
なんの足しにもならないと思っていた
「絵」という代物がこんなにも魂の深部にまで響き、さまようという心情をかき立ててくれるとは……

患者にとって、
病院のなかに在る「絵画」は異世界への入口を指し示す」。

(11・5の日記より)

あえて…

ですか…

コワイもの見たさに興味が湧きます。
2度は読んだと思うのですが、かなり過去のことで…

文学はいいですね。

思い立ったら、いつでも、その世界のなかに入っていける…いますぐにでも。

「もぐら通信」あればこそです！



2013・安部公房の重要ニュース

編集部

没後20周年を迎えて幕を開いた2013年。思い起こせば多くの出来事がありました。

これらを「十大ニュース」としてまとめて読者のご供覧に付そうとしたところ、10を優に超えてしまい、絞るに惜しいのが続出。あきらめて主なものをすべて起きた順に並べ、1年の流れを思い返すこととさせていただきます。

- (1) 1月22日、安部公房没後20年を迎える。
- (2) 未発表の「天使」を含む『(霊媒の話より) 題未定：安部公房初期短編集』が新潮社から発行されました。(1月)
- (3) 安部ねりさんと加藤弘一さんのトークショーが紀伊国屋新宿店で開かれました。(2月)
- (4) 朝日新聞に「はじめての安部公房」特集が掲載されました。(3月)
- (5) 実弟の井村春光さん宛て安部公房の手紙が30数通発見されました。(4月)
- (6) 木村陽子氏『安部公房とはだれか』が発行されました。(5月)
- (7) 『週刊新潮』に安部ねりさんが語る安部公房のエピソードが掲載されました。(5月)
- (8) 日本経済新聞に安部公房特集が掲載されました。(6月)
- (9) 友田義行先生が安部公房研究で日本比較文学会賞を受賞されました。(6月)
- (10) 山口果林氏『安部公房とわたし』が発刊されました。(7月)
- (11) 東鷹栖安部公房の会が安部公房展、朗読会、講演会、資料発行と活発な活動をされました。(8月他)
- (12) 写真誌『IMA』に安部公房撮影の写真が掲載されました。(8月)
- (13) 演劇誌『テアトロ』に安部公房特集が掲載されました。(12月)
- (14) 鳥羽耕史氏『安部公房 メディアの越境者』が発刊されました。(12月)
- (15) 新潮社季刊誌『考える人』に安部公房の書齋写真が掲載されました。(12月)
- (16) あさひかわ社から『安部公房を語る』が発刊されました。(12月)
- (17) 没後20年にあたり多くの安部戯曲が公演されました。



2013・もぐら通信の重要ニュース

編集部

一方、発刊2年目を迎えた「もぐら通信」も、多方面にわたり活動の場を広げ、あるいはメディアで紹介され、お陰様にて購読者数が順調に増加して参りました。これも皆様方のご支援のたまものと厚くお礼を申し上げます。重要ニュースをまとめてみました。

- (1) 毎日新聞で「もぐら通信」が取材を受け、紹介の記事が掲載されました。
(1月)
- (2) 大江健三郎さんが「図書」(岩波書店)で、もぐら通信を取り上げて下さいました。(2月)
- (3) 編集部3人で安部公房縁りの地・旭川を訪問しました。(3月)
- (4) 朝日新聞(5月)および日本経済新聞(6月)の安部公房特集で紹介されました。
- (5) 「もぐら通信」発刊1周年を迎えました。(9月)
- (6) 国立国会図書館にオンライン資料として収集されることになりました。
(11月)
- (7) ドナルド・キーンさんのお力添えで、コロンビア大学東アジア図書館に収蔵されました。(11月)
- (8) 日本近代文学館にも収蔵されています。(11月)
- (9) 安部公房の共産党除名の日を確定するスクープを發しました。(12月)
このほかにも、独自の資料など、多数発掘して参りました。
- (10) お陰様にて読者数は600人を超えました。(12月)

なお、関係記事については、本号巻末の「もぐら通信」総目次から、各号においてご覧いただけます。



KAP読書会報告

— 『密会』 —

報告者 wlallen

昨年(2012年)の12月14日(土)に、京都市右京ふれあい会館にて、第五回KAP読書会(関西安部公房オフ会)が開催されました。課題図書は、『密会』でした。年末ということもあり、集まったのは4人のみでした。もぐら通信編集部員の3人と第15号に卒業論文を転載させていただいた嵐さんとで、4時間みっちり議論しました。

まず、岡田氏が司会を務めました。自己紹介から始まり、『密会』についての各自の感想を述べました。次に、私がウィキペディアの『密会』の項目のあらすじと登場人物を使用して、この小説の概観を述べました。ウィキペディアの文学作品の項目は不正確なものが多いですが、『密会』に関しては、完成度はかなり高いものでした。その後、私のブリーフィングを簡単に読ませてもらいました。作成に時間があまり取れなかったので、やや物足りないと思われる方もおられるかもしれません。

その後のフリートークは、岩田氏に司会をバトンタッチして始まりました。主人公が溶骨症の少女に思いを寄せるのは分かるが、彼女の方の心理はどのようなのか？

「二人だけの密会」ではなく、何故「一人だけの密会」なのか？

「何度も確実に死につづける」とは、生きつづけるということではないか？

リカーシブ(再帰的)な小説構造になっていないか？

エレベーターの中に盗聴器が仕掛けられてないのは何故か？

そもそも、盗聴テープ愛好者に売る商売だけのために、盗聴しているのか？

密通と密会の違いはなにか？

地理的構造がわかりにくいので、誰か地図にしてほしい(笑)

など、いろいろな意見が出されました。

嵐さんは、卒業論文の要約をしてくださって、発表されました。

その後、再びフリートークに移り、果てしない『密会』談義に浸りました。

二次会は、いつもの通り、餃子の王将（その後、社長が銃殺されるという痛ましい事件が起こりました…）で4人で飲食しながら、安部公房談義に花を咲かせました。

次回は、『壁』を予定しています。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

次頁より、私のブリーフィングと嵐さんの卒業論文の要約を掲載します。

『密会』 ブリーフィング

wlallen

○刊行

1977年、新潮社より刊行された書下ろし長編小説。

○構成

ノートⅠ、ノートⅡ、ノートⅢ、付記の4章の構成。

Ⅰ、Ⅱは、副院長への報告書。

Ⅲは告発、叛逆。

○溶骨症の少女（13歳）に出会うまでは、副院長（馬）の言うとおりに、盗聴テープを聴き、報告書を書く。溶骨症の少女に惹かれ、彼女を連れ出し、「密会」をする。

○『都市への回路』で安部が語ることの思想のほとんどは、副院長の台詞である。

逆進化（弱者が生き延びれる社会）、 「良き医者は良き患者」（インポテンツを肯定的に捉えている？）

○性的、排泄的描写が多いのが特徴

○言語心理研究所

副院長の妻は、嘘発見器の権威

「私と寝たいと思いますか。」との質問

○院長の失踪

空襲恐怖症のため、病院自体を地下に埋めた
副院長も行方を知らないらしい

○迷宮のような病院

「賭」につながるのではないかとの指摘(*1)

○帽子(*2)、権力の象徴

三本筋、一本筋

→病院もまた階級社会

○妻もしくは仮面女

副院長の仮説だが、オルガスム・コンクールのために、病院に来たのではないかとの推測。アフターピル泥棒との関連性。盗聴テープの意味ありげな部分。

○主人公と妻との関係

妻の描写がほとんどない。良好か陰悪なのかもわからない。

『砂の女』—淋病をきっかけに不和

『他人の顔』—復讐めいた密通
『燃えつきた地図』—別居関係
また、仮面女を見ても、それが妻なのかどうか判別できない。

[補足・訂正]

- *1. 過去のTAP読書会での発言
- *2. 私の誤読でした。「帽子」ではなく、「白衣の胸のポケット」でした。



もぐら通信の予約購読は次のURL
アドレスから：
[HTTP://
ABEKOBOSPLACE.BLOGSPOT.JP](http://abekobosplace.blogspot.jp)

卒業論文「安部公房『密会』論—絶望の書として—」要約

嵐 志保

第一章 第一節

『密会』の患者は 病気であるというだけで医者に支配され

また 監視者によっても支配されています。

患者=弱者は 医者・監視者という強者によって支配されていると思われ
れます。

第二節

溶骨症の少女に（弱者）にとっては 副院長（強者）は絶対に逆らえない存在です。

また 仮面女は自分の身を守るために 人格まで放棄して、強者に対して絶対的に服従します。

これらのことから彼女たちは 真の患者=最弱者であると考えられます。

第三節

副院長は人間関係神経症という病を患い インポテンツになります。

女秘書は人間関係どうしの関係感覚と言うべきものが完全に欠落してしまっている不感症です。

この二人は 強者でありながら弱者であるとも言えると思われ
ます。

第四節

逆進化とは人間の進化であり 弱者の生存権の拡張であります。

『密会』の病院社会は弱者だけが存在する世界であり 逆進化の論理が取り入れられていると考えられます。

第二章 第一節

『密会』の病院社会は現代の都市の縮図であると考えられます。

患者は医者と接するとき 人間であること=人格 を放棄しようとするため 人間関係が希薄であります。

したがって 患者と監視者との間には抽象的な人間関係が結ばれています。

弱者(患者)は人間関係が希薄であるため 皮膚による接触を求めようとします。

第二節

都市は移動性と無名性という特性を持つ空間であると考えられます。

したがって 人間関係が希薄な 抽象化された空間です。

都市に自由への可能性を信じ 安部は『他人の顔』『箱男』という作品を書きますが そのいずれも 主人公は孤独に耐えきれず 最後には性犯罪者的な存在となってしまう。

そして この『密会』もそうであると考えられます。

第三節

男は健康体そのものでありますが 突然 病院に来ることになります。

そこで様々な患者(弱者)と出会います。

男は 一度は病院側(強者)に付いたかのように見えますが 逆進化の論理に基づく病院社会を拒み続け 溶骨症の少女を連れ出します。

しかし 最後には彼女と共に閉じ込められてしまいます。

男は最後に 患者になることを叫び続けますが 結局 弱者の共同体から排除されてしまいます。

第四節

その男が安部と重なって見えてきます。

安部は人間関係が固定化されていない抽象化された空間である都市に 自由への可能性があると信じ 作品を書き続けていきます。

ですが その作品には人々が都市の中で孤独になり 病んでいく姿ばかりが描かれています。

人々は未知の新たな通路を発見できず 孤独感にさいなまれています。

『密会』の男の叫びは安部の叫びでもあります。

おわりに

『密会』という作品からは 都市に自由の可能性を模索し続けてきた安部の暗い絶望が見えます。

しかし 安部は作品を書き続けていきます。

絶望もまた 希望の一形式なんじゃないかと。。。



Rhuncus tembor blacerat.

私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『アサヒグラフ』（昭和28年9月28日号）

岡田裕志

この号に「厨房の殿方」というページがあり、「殿方のご自慢料理」を紹介していて、安部公房の記事も掲載されています。この記事は、安部公房全集の「参考文献目録」にも記載がなく、今回、この記事の著作権フリー（掲載後50年経過）が確認できたので、写真と記事内容を紹介しておきます。

以前にもちよっと触れたことがあります。安部公房の得意料理は瀋陽仕込みの「ギョウザ」です。

誌面の前置き（リード）は

「殿方料理」というと予算のおかまいなしに材料を使ったり、ありったけの食器をよごしてあと片付けを奥さんに押しつけたりでとかく評判がよくないものだが実際は男性の方が外食することが多く、また外国の土を踏む機会も多いので

「舌」が肥えているはずだから男性の自己流ホンヤク料理、やもめ向ものぐさ料理などには案外おもしろいものが少なくない。そこで「殿方のご自慢料理」の腕を拝見してみることにした。

以下本文です。

安部公房氏（作家） ギョウザ

瀋陽（昔の奉天）の育ちなので中華料理が得意「ウドン粉に少し澱粉をまぜるといい 中味にはラードを少し入れて」と解説もかなりのもの あるとき画家の真知夫人が外出して遅く帰ったら公房氏豪華な中華料理を作ってテーブルに飾って

待っていたが さて食べようとするゴハンも漬物もないのに気がついたというエピソードがある

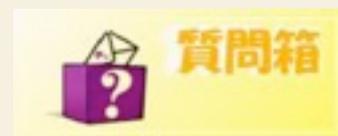
記事はこのように短いものですが、写真を見ると、ランニングシャツ姿にベレー帽をかぶり、左手にギョウザの皮を持ち、右手の箸で具を皮に載せている。慣れた様子である。左上の写真は完成したギョウザの皿。この他にも「豪華な中華料理」を作れるのだろう。

なお、他の殿方料理は、山本嘉次郎氏（映画監督）のカジキのさしみ、中村哲氏（法政大学法学部長）の洋風ネギマ、桶谷繁雄氏（東京工業大学助教授）のフレンチ・ヌカミソ、岡本太郎氏（洋画家）のダッタン人のビフテキ、であり、安部公房の下の写真は岡本太郎氏である。



質問箱

－資料など探索依頼と「回答」のページ－



[このページでは皆さまの安部公房に関するご質問を受けます。ご回答いただける方は編集部までご連絡下さい。質問には、これまで調べた範囲など書いていただくと手間が省けます。なお、回答が寄せられた分についても、継続してさらなる情報をお待ちしています。このページが読者の皆さまのよき交流の場となることを願っています。：<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>]

【質問】

2013年11月27日

日本共産党中央委員会
ご担当の方へ、

お世話になります。

もぐら通信という安部公房という作家の読者のための月刊誌を発行しているものです。

頭書の件、安部公房は1951年に共産党に入党、その後10年を経て、共産党に除名をされますが、この年につき、世上にふたつの説あり、ひとつは、1961年であるという説、もうひとつは、1962年という説です。

このいずれが正しいものか、ご確認、ご教示戴きたく存じます。年月日をお教え下さると誠にありがたく存じます。

この事実は、大学や在野の研究者にとって重要なことですので、ご教示戴けるとこの作家の研究に裨益すること大きいものがあります。

よろしくご協力、お願い申し上げます。

岩田英哉
もぐら通信編集部

【回答】

2013年12月13日

ご質問にお答えします。安倍公房氏(原文のママ)が党規約を認めないことを公言し、党の方針に反する活動をおこなったことによって日本共産党を除名されたのは、1961年9月6日です。

日本共産党中央委員会 質問回答係[日本共産党中央委員会メール室]



安部公房の変形能力 15 : 安部ヨリミ

岩田英哉

安部公房と安部ヨリミの関係を考えて、これを文字に表すのに、一体どこから入ったらよいだろうかと、しばし考えた。幾つかの入口があるのです。

安部ヨリミは安部公房の母親であるから、母という言葉と、対して父親という言葉を考えてみて、これら二つの言葉の差異から、安部公房と母親の世界に足を踏み入れてみようと思います。

読者が既にご存じのように、贗の父親という登場人物は安部公房の小説のあちこちに出没しますが、贗の母親という者は、どこにも出て来ません。

父親に贗はあるが、母親に贗はない。これは何故でしょうか。

『異端へのパスポート』というエッセイがあります（全集第22巻、139ページ）。1968年、安部公房44歳。

ここで、安部公房が、母なる大地（定住民の土地、国家）と父なる地平線の向こうを対比させているところがあります。

「「母なる大地」……そう呟いて、激しい内面の葛藤と闘いながら、じっと沃土に犁（すき）の柄をやすめて立つ原始耕作民の視線は、おそらくつねに遙かな地平へと向けられていたに相違あるまい。地平線の彼方、父なるものへの、深い畏怖と憧れの思いをこめて。」（全集第22巻、145ページ上段）

このエッセイを読むと、父親という形象（イメージ）は、定着、土着ではなく、遊牧であり、旅する者なのです。そして、そのような母なる大地の地平線の外へと出て行く者が、贗の父親になるのです。

贗という概念が、安部公房にとってどのように独自の概念であったかは、その論理を閉鎖空間との関係で「もぐら感覚16：贗の父親」で論じた通りです。

このことから、母なる大地という閉鎖空間を脱し、国境を超え、地平を超えて行く者が贗の者であることは、容易にうなづけることでしょうし、それが母親の反対の存在であれば、父親であり、父親は脱出する者である以上は、それは贗の父親になることも、そうして様々な脱出方法のあることから、それも様々な父親に

なるということも、安部公房の論理としては当然のことだということになります。

『詩人の生涯』という作品があります（全集第3巻、73ページ）。1951年、安部公房、27歳です。

ここでの母親は、機織りの機械に取込まれて、一枚のジャケットになってしまいます。季節は冬で、すべての貧しい人々が凍りついて静止してしまうときに、このジャケットである母親は、「工場の門のわきで、小脇いっぱいビラをかかえ、出てくるものに手渡そうとする姿勢のまま凍りついていて、彼女の息子」、詩人である主人公のところへやってきて、息子をすっぽりと包み込みます。そうして、息子は息を吹き返し、動く事ができるようになります。そして、この詩人は、「不思議そうにあたりを見廻し、自分の赤いジャケットを目にとめた。突然彼は自分が詩人であることに気づき、うなずいて笑」うのです。

貧しく凍った息子を言わば解凍する優しい母親に包まれて、主人公である詩人の息子は自分の本分を思い出しますが、『異端のパスポート』でみたように、母親は定着であり定住なのですから、詩人であれば尚のこと、その閉鎖空間から脱出をするという結末になることは、安部公房の読者には自明のことです。

この小説の最後では、やはり詩人は「完成したその詩集の最後の頁を閉じ」るや、「その頁の中に消えてしまっていた」という結末になっており、ジャケットである母親の閉鎖空間から脱出することになっています。そこから先の話はありませんが、その外に出て、きっとこの詩人は贗の父親に変身していることでしょう。

安部公房が20歳のときに書いた論文に、『詩と詩人（意識と無意識）』という重要な論文があります。これは、安部公房の10代の思考の総決算というべき論文です。ここに、母親への言及があり、次のところを読むと、安部公房が母親という者一般に対して、また自分の母親である安部ヨリミに対して、どのように考えたかがよくわかります（全集第1巻、110ページ下段）。

この引用箇所のある章は、「三、再び真理とは？」と題されており、引用の前段では、真理という言葉を含んだ、主語と述語からなる一行の文が、どれほど様々な解釈を可能にするかということを示す為に、実に精細精緻な解釈を提示しています。様々なという言葉から、「様々な父」という小説の題名を連想す

ることができるように、ここには一行の文の意味を超えて、その外へ出て行く、詩人の意識のあり方が論ぜられているのです。詩人は、あくまでも男であり、父親になり得る、人間の典型として、この論文では描かれております。

さて、引用の前段では、安部公房は、外部と内部の交換、即ち次元変換を果てしなく繰返して、遂には「第三の客観」と呼ぶ究極の客観に至ります。このとき、「新たなる、夜の使者とも言う可き第三の客観が代って現れて来」ます。以下、引用を続けます。

「第三の客観とは、正しき主観の上昇的次元展開の極限であった。そして此処には一種の詩的体験が必要なのである。此の第三の客観は受容者を選択するのである。そして子が母に選択的に属すると同時に、それから分離して新しき世代の独立者になる如く、此の客観も、其処に収斂して行った主観の個別的な性格から離れて、何時か宇宙的な詩的体験として、是も亦純粋な人間の在り方に昇華されて行くのである。」

第三の客観と人間の在り方の関係を譬（たと）える際に、安部公房がここで言っている「そして子が母に選択的に属すると同時に、それから分離して新しき世代の独立者になる如く」という譬喩（ひゆ）が、安部公房が母親なる者をどう考えているのかということを考える契機を与えてくれます。

「子が母に選択的に属する」という表現は、如何にも安部公房らしい。これは普通の母子の関係ではありません。この世に生まれて来る男は、選択できない母親から生まれるわけですから、そこにそもそも選択性はないのですが、それでも安部公房は敢えて子が母親に持つ選択性を言うのです。

この文から解る事は、安部公房は思考の上では母親との関係を一旦切り離し、主体（母）と客体（息子＝詩人）を交換して（これが安部公房の思考の典型）、子供たる息子に母という（今度は母親が客体になる）客体に、主体たる息子である詩人が帰属するという論理を展開するのです。そして、そのような譬喩にある通りのことを詩人は為して、「新しき世代の独立者に」なり、かくの如くに、第三の客観も「純粋な人間の在り方に昇華されて行く」と言うのです。安部公房にとって詩人とは、一言で言ってしまえば、第三の客観である「純粋な人間の在り方」なのです。そのような詩人の純粋な在り方が、母親の譬喩で語られることは注目に値します。

さて、しかし、これは普通の生きた人間の母と息子の関係では全然ありません。この詩人の世界は、そういう意味では、そして非常に通俗的な言い方をすれば、この世ではなく、あの世の世界であり、ここで安部公房が実に論理的に確立しようとしている詩と詩人の関係、意識と無意識の関係に適用している女性である母と息子の譬喩（ひゆ）は、この世ならぬ、あの世の関係だということになります。

この考えは安部公房が女性と母親を意識したというよりは、むしろ10代に理解した安部公房独自の実存の概念に基づいているのです。安部公房の実存の考えは、「実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方」とある、この「未分化の実存」という理解にあります（『錨なき方舟の時代』という対談。全集第27巻、167ページ下段。1984年。安部公房、60歳）

この人間の未分化の在り方という考えにあくまでも基づいて、上に引用した母親と息子（詩人）との関係を考えたというのが、正しい理解の順序です。

ここに、安部公房の女性観の原型があります。前回の『安部公房の変形能力13：ルイス・キャロル』で論じましたように、ここで、この場所で、安部公房の典型的な2種類の女性像が生まれます。以下に再度引用します。

「一人は、成熟した性的魅力を横溢させている、敢えて誤解を恐れずに言えば、娼婦のような性的に成熟したエロティックな成人の女性が、一人の典型です。『箱男』の看護婦、『密会』の副院長の女秘書、『方舟さくら丸』のサクラの女性、『カンガルー・ノート』のトンボ眼鏡の看護婦、『飛ぶ男』の小文字並子等々。

もう一人の女性は、わたしは偏奇な少女と呼んでいるのですが、一寸普通ではない少女、即ち性の分化する前の女性で、また女性になっていない、性的には未分化の状態にある女性で、何か普通の子供とは違う少女です。『他人の顔』に出て来る、主人公が二つ目の住まいを借りるアパートの管理人の娘、『密会』の溶骨症の少女、『カンガルー・ノート』の垂れ目の知恵おくれの少女等々。

この後者の少女、未分化の状態の女性、敢えて言えば実存の状態を体現した少女が、安部公房の好きな女性にぴったりとしたアリスであるのに、違いありませ

ん。」

さて、従い、安部公房の女性に対する態度は、二つの典型的な女性との関係を全く現実とは異なる、そういう意味では非現実の、しかしなお現実感に満ちた別の世界、次元変換（外部と内部の交換）によって創造された異次元で結ぶことだということになります。

そのような形で、安部公房は、女性に対して選択的でありたいと思ったのです。そうして、その限りにおいて、子たる詩人、芸術家安部公房は、「純粹な人間の在り方に昇華されて行」き、そうして初めて親たる母、即ち女性に帰属することができるからです。これが、安部公房の論理であり、こころの奥に、その性欲の在り方とともに深く宿っている女性観であり、女性観の原型なのです。

そうして、『詩と詩人（意識と無意識）』を書いた後の時間の中で出逢ったのが真知子夫人でありました。真知子夫人と結婚したときに、安部公房は成城高校時代に親しく哲学談義をした友、中埜肇宛の書簡（全集第1巻、267ページ）で次のように語っています。1947年、安部公房23歳。

「さて、僕の結婚ですが、驚かれたでせうね。眞知子と言って廿二才の今年美校を出たばかりの女流画家(?)です。僕等は或る音楽茶房で知合つたのです。そしてお互いに気に入りました。そして結婚しました。僕は結婚する動機と言ふものをそれ程大きなものだとは考へません。問題は結婚した後の生活、又は生活態度に在ると思ふのです。与へられた環境と言ふものは、それが如何なるものであつてもすべて同等な課題であると思ふのです。環境と言ふものはやはり乗り越へて行く可きものではないでせうか、これは環境と戦ふという意味ではありません。むしろ止揚すると言つた様な意味です。勿論結婚は危険なものです。それはよく解つています。その事は眞知子にも常々話すのです。けれど、最も悲しい此の人間の拙なさに於いてこそ、何よりも大きい課題が与へられてゐると思ふのです。僕は此の孤独の中で愛を學んで行きたいと思ひます。少なくともその決心をしております。

サンボルと言ふものは経験の年によつて次第に老ひ込み、終ひには習慣と言ふ恒数に迄追ひやられて終ふでせう。これが何よりも恐ろしい生存の没落です。それは或る意味で生存の不注意から来るものです。僕はしつかりと各瞬間の存在の生誕であるサンボルを掴んで行きたい。」

このテキストから読み取ることのできることは実にたくさんあります。例えば、果てしない次元変換を繰り返して第三の客観に至ること、即ちその方法によって現実を一旦忘却し記憶の中から浮かび出る物事を再構成して存在象徴（この手紙では「サンボル」と言っている）となすことが、ここに再び書いている様に「経験の年によつて次第に老ひ込み、終ひには習慣と言ふ恒数に迄追ひやられて終ふ」ことに対する恐怖心。これは、安部公房が10代の詩集『没我の地平』に収録した「理性の倦怠」に「沈黙して待てる恐怖の墓」として歌ったそのような状態を墓と呼んだ、その恐怖心です。しかし、今は主題から逸れることをせず、次のまた別の中埜肇宛の書簡（全集第1巻、269ページ）を引用して、論を進めることにします。

「僕の結婚について、……少々異論がある。第一に、僕は結婚についてそれ程大きな意味を考へてはゐない。單に社会形態が帰結した名称に過ぎないものだと思つてゐる。やはり是はその場、その時に当たって、各存在象徴に潜む個々別々な問題ではなからうか。君の言ふ様に、結婚は別に僕の闘争から生み出された美しい安住の地でもなんでもない。やはり一つの存在象徴であり、自我象徴の在り方によつて無とも偶然とも無限ともなるものだ。僕は新しい戦ひの場を自ら選んだものだと考へてゐる。僕は此の共同態を通して、尚ほ一層苛酷に存在の孤独、愛の限り無さを見詰めて行くつもりだ。その点は妻も理解し、同意してゐる。君の言ふ一層困難な事態を、僕等は互ひに承知の上で、いさぎよく引受け、背負つた次第だ。勿論僕達を結んだものは愛だった。しかし、それよりもむしろあの絶望に対する共感であり、存在象徴の無に対する決意であつたと言つても、君になれば理解して戴けると思ふ。」（と書いた後で、リルケとニーチェに學んだ安部公房独自の実存についての記述が始まります。御興味の在る方はお読み下さい。）

この二つの手紙の引用を読むとよく判るように、安部公房は上で論じた女性観を以て、眞知子夫人と結婚し、眞知子夫人には、そのような女性観の実現を願い、期待したのです。

結婚において孤独を育むとは、そのような意味なのですが、しかし、これは、普通の男が女性を愛し、結婚する場合とは相当異なるというべきですし、むしろ全く逆のことではないかと思ひます。普通の男は、「勿論結婚は危険なものです」とは考へません。そうではなく、結婚によつてそれまでの孤独を離れ、安心して、家庭を持って、女性と一緒に、或いは一心同体となつて、その家庭を築いて行くと考へるものではないでしょうか。それが男の幸せであり、女の幸せであ

り、夫婦の幸せであり、家族の幸せである。しかし、どこまでも、安部公房にとっては実存という概念が、存在象徴を捕まえて創作をすることが、その人生において本質的なことであり、大切なことなのです。勿論それは、世間的にどんなに我がままに見えようとも、芸術家の道としては正しいことでしょう。

その芸術家人生の前半の、社会と国家の中に出て行く20年が真知子夫人との20年であり、1973年の『箱男』からの後半の、リルケの純粹空間へと大きく弧を描いて回帰し、隠者の生活に帰還する後半の20年は女優山口果林との20年であるのは、上に論じた安部公房の女性観の求める人生であったのだということです。このように、安部公房の人生は、安部公房の思考の形式の通りの、円弧を描いて、誠に美しい幾何学的な対称性を備えております。この安部公房の人生の見取り図については、次章でお目にかけることに致します。

さて、安部ヨリミの話です。

安部ねり著『安部公房伝』に、安部ヨリミについての次の記述があります。

「ヨリミは特に公房の養育に熱心だった。公房につききりで勉強を教えた。ヨリミは、師範学校で学んできた文学理論を、公房に伝えた。(略)リアリティーの手法として「隠す」という表現や、細部を具体的に表現することによって感覚を伝えることなどをヨリミは教えた。」(類似の記述が、全集第30巻615ページにもあります。)

この記述を読みますと、安部ヨリミが教えたことは、まづ次の2つです。

- (1) 隠して表すこと。
- (2) 細部の感覚を具体的に描くこと。

このことを安部公房の文学の3つの座標軸、リルケ、ニーチェ、ポーとの関係で考えると次のようになります。

1は、そのまま10代に耽読したリルケの詩作の骨法に一直線で繋がっています。これは既にリルケのところで論じた通りです。

2は、ニーチェの概念から生への没落という受容の中に、生の細部を生理的な感覚を以て描くという安部公房の終生変わらぬ姿勢の中に、この教えも一直線に繋がっています。

このニーチェの受容については、高校時代の散文作品「問題下降に依る肯定の批判」（1942年。18歳）にそのことが論理を以て、詳しく論ぜられています。この作品を読むと、18歳の安部公房がニーチェをどのように自分のものとして変形させたかが、よく解ります。これも、ニーチェのところで詳述した通りです。

それでは、ポーの仮説設定の文学は、どうやって安部ヨリミから安部公房に繋がるのでしょうか。

既に「安部公房誕生の秘密～安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読み解く～」（もぐら通信第2号）で論じたように、現実にある人間関係を引っくり返し、人物の立ち場を入れ替えて虚構をつくるという強靱で論理的な思考と発想が、そのまま安部公房の散文作品、19歳のエッセイ「僕は今こうやって」と20歳の論文「詩と詩人（意識と無意識）」には、顕著に受け継がれているのを見ることができます。この能力がそのままポーの仮説設定の文学を受け容れる土壌となっています。或はまた、言い換えますと、安部公房の仮説とは、逆理であって、物事を引っくり返して、否定的に裏側からみることだと言っても同じです。

このように、安部ヨリミはそのまま息子、安部公房の文学の生まれる母胎の座標、終生安部公房に寄り添うもうひとつの、隠れた、尊き座標となっています。

安部ヨリミの生涯唯一の作品『スフィンクスは笑う』（講談社文芸文庫）から、実に安部公房的な箇所を以下に引用します。勿論時間の中の事実は順序が逆で、如何に安部公房が安部ヨリミであるかということなのですけれども。安部公房の10代に書いた詩から、最後の『カンガルー・ノート』までの作品群を念頭に於いて、お読み下さい。

「秋風の音を聞くと、忘られていた何者かが私の心に蘇ろうとあせります。様々な回想が扉を開いて私の心を靡（まね）きます。其処にはあなたも、別れて来た沢山の友達も、故郷も、父母も、それから私の恋愛の道も、様々なものがあります。孤島に生まれ落ちて、盲（めし）いて暮らして来たような私に、ふっと、様々な、温かい、冷たい、或は恋しい、或は暗い思い出の蘇って来る事は、只私には驚きです。横たえられた三味（しゃみ）に、ふと袂が触れたように、私の頭は様々な追憶の音に掻き乱され、咽（むせ）ばされます。

あなたは私をどうお考えになります。」（同書9ページ）

「——今自分は幸福なのだ。そして、凡ての人がそうであるように、私も亦未来を知る事ができない。そして、凡ての人がそうであるように、私も亦老いそして死ぬのだ。（略）——だから今の生活を専念に享樂し、満足の中に安心立命を見出だす事だ。遠くを見渡す事をやめて、只、足許を見ればそれでいいのだ。未来のことは誰も知る事が出来ないのだから——。」（同書15ページ）

「私は子供の時から神を信じたくて信じたくて仕方がなかった。邪宗でも迷信でも何でもかまわない。天理教でも大本教でも回教でも道教でも拝火教でも、何でも信じられたら信じてみたい。そしてともかくも、常に神と一緒に居るという信念がほしい。」（同書21ページ）

「私は私のような、異端者に、子供を育てるにしのびない。」（同書22ページ）

「そして、夢だから妙なんですけれど、其処に居る人達全部が、私の逃げて来た事情を知って居り、之から、遠い所へ私が逃げようとしているのだと云う事を知っていて、私の方を見ないふりをしながら、始終注意を払っているんです。庭の周囲は葉の散ってしまった生垣になっていたのので、其間をくぐって逃げればいくらでも逃げられるんですけれど、どうしても沢山の人に見張られていて駄目なんです。けれどとうとう私は逃げ出しましたわ。」（同書55ページ）

「本当にそうだ。君の云う通り、世の中の事凡て空の空なるものに違いない。大きく、最後の事を考えてみるとね。だが、私は、空の空なるものであるが故に苦るしまないではいけないんだ。人生は短く憂患は多い。神を信じている人はそれを神の試練だと云う。が私のような異端者は、何の為に苦るしむ必要があるんだ、と反逆がしたくなる。人生は短い。だから苦るしみを我慢出来ないんだ。」（同書71ページ）

「一燈園を昵々と凝視つめて居ると其処に私の心を戦慄させるものがあつた。『革命』、それでなくて一燈園の生活は肯定されないだろう。然し革命は人の世の夢だと私は考える」（同書113ページ）

「誤って終ったならば私はもう諦めよう。捨てて来た世界に就いてはもう考えまい。愛ももう口にすまい。私は只行く先を知らぬ迷路に立っている事だけを感じずる。私はもう取り返しのつかない体だ。永久に葬られた私だ。私はそれを惜しみはすまい。

只、私は此の子供を、太陽の輝く白い道に送り出してやりたい。——」（同書243ページ）

しかし、時間の中で母親が子供を生むという関係が生じて、時間の中の順序でこの安部ヨリミの小説を考えると、安部公房が安部ヨリミという作家から承継した本質的なもの、それは、安部ヨリミが『スフィンクスは笑う』で採用した書簡体であり、手記という形式に他なりません。

安部公房にとって、小説を書く事は、安部ヨリミと同じく、手記を書く事でした。それも手記の余白に書く事でした。それが、たとえ『マルテの手記』に深く学んだ安部公房の方法であったにせよ。

そうして、安部ヨリミが教えた自分の生理感覚に忠実に細部を描くという教えをもっと哲学的に対象の無意識から意識への現れを言語化するときに、自分の生理感覚に忠実に主に直喩を、詩的な表現のときには隠喩を使うという形に変形させて、安部公房独自の世界を、安部公房は創造しました。その教えの換骨奪胎と変形の過程は、18歳から20歳までの散文の作品に、よく表れています。

最晩年の『カンガルー・ノート』に、安部公房は母親を登場させます。その母親について安部公房が述べた言葉があります。それは、『われながら変な小説』と題したインタビューに答えた次の言葉です（全集第29巻。1991年、安部公房、67歳）。

この作品には、人さらいや様々な「他にも似たようなシンボルが各章にちりばめられている」と言った後に、

「おふくろの登場もその一つかな。トカゲか、みみずの干物みたいな顔をした三味線を弾く老女。あれ、本物のおふくろをモデルにしたわけじゃないんだ。実際のおふくろはけっこう大正モダンガールだったらしい。申し訳ないと思いながら、ああいう凄なおふくろを登場させてしまった。まあいいだろう。どうせ本物のおふくろは死んでしまったんだし……(笑)。」

ここの箇所を読んでわかることは、20歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』で言及した母親との関係のあり方の通りに、安部公房は、この小説でも母親をシンボル（存在象徴）として表現をしたということです。

安部公房の創作原理は、全く10代のときから終始一貫して不変です。これは、実は物凄いという以外にはない、常人の力を超えた並外れた能力だと、わたしは思います。

そして、不思議な暗合のようにして、存在象徴としての安部公房の描いた母親は、安部ヨリミの『スフィンクスは笑う』の、上の最初の引用にあった三味線を持って、登場するのです。しかも、上の『詩と詩人（意識と無意識）』の母親の譬喩で見た様に、この世ではなく、あの世に母親が登場します。

「ドラキュラの娘」という章に、主人公の母親が三味線をひいて登場するので。主人公が、「沢山だ、そんなもの聞きたくもない」と言って、「引き抜いたキャベツを、投げつけ」るのですが、それに対して母親は「親不孝者めが！」と叫び返します。この「親不孝者めが！」という科白をもう一度言ってみたくって、再度同じやりとりの演技を主人公とするところを以下に、引用します。最初のところは、母親の採血をしようと注射器を構えているトンボ眼鏡の看護婦に向かって話かけています（全集第29巻、140—141ページ）。

「「あの子に、親不孝者で叱ってやった場面、もう一度やらせてよ。三分とかからないでしょ。お願い、すごく幸せだった。生きているうちに、一度でいいから言ってみたかった……」

トンボ眼鏡がぼくを促す。ほっと力を抜いて、息をつく。その態度の急変にまごつかされながら、

「忘れたよ、どんな場面だったか」

「やってもらえるんだね、よかった」入れ歯をくわえなおし、三味線を抱えた。
「最初、母さんが撥を当てるからね、坊やが文句をつけるの」

「よせったら、母さんだとか、坊やだとか……」

「なんと云えばいいのさ？」

「昔はママって呼んでいたっけ……」

「ママ？そのほうが、よほど気色悪いじゃないか」

はじめて女二人が、笑いを揃えた。

「要するに二人称を使わなけりゃいいんだろ」

「構いませんよ」弦に撥をあて、「はい、ここですかぎず、文句をつけて！」

「どんな？」

「つけたじゃないのさ、ベッドのことで」

びりびり濁った弦の音。

「忘れたよ」

「適当でいいから」

「そう言われても……」

弦よりも、胴にあたる撥の音。

「不忍の 水面にゆれる 紅椿……」

「よせ、ぞっとするよ」

「もしや ほとぼしる 血しぶきか」

「どこか、ほかに行って、やってくれよ」

うなずき、一拍おいて、

「親不孝者めが！」

女ふたりが息遣いを合わせた。」

この母親像は、確かに『詩と詩人（意識と無意識）』で譬喩として挙げた、選択的に母親に帰属するという安部公房の論理に濾過されて再構成された、シンボルとしての母親像になっています。安部公房らしくグロテスクでユーモラスな母親です。

また同時に成熟した性的魅力を横溢させているエロティックな看護婦と一緒にいて、母親と声を2度も揃えるというところも、安部公房の意識にとっての、上に論じた安部公房の女性観から来る意味の伏在を感じさせます。

次回は、今までの連載を書いて知ったことのまとめをし、安部公房の芸術家としての人生とその人間像の全体を俯瞰して論じたいと思います。題して、安部公房の人生の見取り図と再帰的人間像、です。



もぐら感覚 18 : 部屋

タ克蘭ケ

部屋。安部公房の部屋。これは、安部公房が生涯を通じて書いた空間の、重要な原型のひとつです。

しかし、安部公房は、この部屋という空間を閉鎖空間とは考えておりません。勿論閉鎖的ではあるでしょうが、明らかに閉鎖的な空間と考えているのは、『問題下降に依る肯定の批判』によれば、当時就学していた高等学校と、その学校の外側にある社会です。特に後者は、蟻の社会と呼ばれていて、既に10代の安部公房にとっては、出口の無い閉鎖空間と考えられていました。

安部家本家の長男として生まれ育った安部公房にとって、家というものもまた、閉鎖的な空間と考えたのでしょうか。それは、上のように考える文学的な少年にとっては、その可能性は充分にあることでしょう。しかし、更にまた、その家の中にある部屋という空間を、それならば、やはり閉鎖的な空間と考えたということも大いにあり得ることでしょう。

しかし、以下に見て行くと解りますが、この部屋という名前と呼ばれる個人の空間と、閉鎖空間と安部公房の考えた社会という閉鎖空間とでは、同じ閉鎖的な空間でも、それぞれ違うもののように見えます。

前者はあくまでも個人に徹した空間であり、他者への通路をいつも安部公房が考えるときの出発点となる空間であり、他方、後者は、安部公房が社会を閉鎖空間（蟻の社会と10代の安部公房は呼んでいる一『問題下降に依る肯定の批判』一）と考えて、安部公房の創造する主人公達が脱出を試みるときの空間なのです。

さて、こうしてみると、この二つの空間の関係をどのように安部公房は考えていたのかということを考えることが、安部公房という芸術家を理解するためには大切だという考えに至りました。

後述しますが、前者は、夜の到来とともに、その壁が消失し、外部である宇宙が部屋の内部にも存在するようになり、部屋の内部は外部の中に存在し、ここに外部と内部が交換されます。という事は、後者の場合は、主人公がそのような個人の部屋に夜を招き入れて、宇宙の浸潤がないと、社会という閉鎖空間の外へと脱出できないこととなります。その個人は社会の内部に生きているのですから。

この個人の部屋という空間の壁の消失と社会という閉鎖空間からの脱出一致させることができる瞬間が、夜の到来であるということになるでしょう。そのときこそ、そのときにだけ、安部公房の主人公は後者、即ち社会という閉鎖空間から脱出が出来るのであり、個人の部屋も夜に浸潤されて、他者との通路が開けるのです。そうして、そのときに同時に、社会の内部と外部も交換されるのです。これが安部公房の考えた論理です。この論理が、どのように小説の中に書かれているかを後で試してみることになります。

さて、安部公房が最初に書いた部屋の話をご紹介します。

豊かな安部本家の長男として、安部公房には、個室としての勉強部屋が与えられたことでしょう。そして、それは一番身近な空間であり、孤独でいられる空間であったのではないのでしょうか。

安部公房が小学生であったときに書いた、文献に残る最初の詩が『安部公房伝』（同書26ページ）に出ておりますので、この『夜』と題する、部屋に関する詩を解釈して、次に10代の安部公房の部屋を考察し、更にその先へと筆を進めます。

「クリヌクイ クリヌクイ」
カーテンにうつる月のかげ」

この詩からわかることを列挙すると、次のようになるでしょう。

1. 主人公（話者）は、部屋の中に一人にいる。
2. カーテンの向こうには窓があって、外界の月の影が窓を通して、カーテンに反照している。この場合、この反照は外部にあるものの反映であると、

小学生の安部公房は考えていることがわかります（が、10代になると、それは自己のこころの反映であるという認識に変わります）。

3. 主人公（話者）は、その反照を部屋の中で見ている。
4. 月が外部にあるならば、部屋の中は内部である。
5. 外界の「栗温い」という商いの声は、カタカナで書いてあるので、日本人ではなく異人の声であるようだ。異界からの声のようである。

小学生のときに書いたこの詩のこのような内容が、安部公房が10代になって、詩に親しむようになると、次のような哲学的な用語と概念を備えた詩の空間に変容します。

1. 部屋
2. 窓
3. 反照
4. 自己証認（又は自己承認）

これらの用語と概念を安部公房がどのように考えたのかを、具体的な作品についてみてみましょう。

まづ、部屋について見てみましょう。中埜肇宛書簡第4信（全集第1巻、79ページ）から引用します。1943年、安部公房19歳です。

この引用の前段で、反照についての言及があり、この箇所の後でまた反照についての詩がおいてありますので、安部公房の思考の中では、部屋と反照はいつも一緒に考えられる用語であったことが解ります。また当然のことながら、反照を映すには窓が必要ですので、部屋、窓、反照は、ひとつがあれば他のふたつがあるという連語の関係になっています。この部屋という空間に自己を措いたときに、自己証認という行為の必要性が生まれて、上記4つの用語が連語となるわけです。

「中埜君、どうかどんな時にでも僕達（筆者註：安部公房と中埜肇の友人達のこと）の心が君の心に接してある事を想出して下さい。君がどんなに苦しく想つても、どんなにつらく想つても、君の心の部屋のほんの角つこに、小さく君を見つめて居る眼のある事を忘れないで下さい。そして時々はその部

屋の中で深呼吸する事。其の中で僕達は永遠に語り合ふ事もできるのぢやないでせうか。」

この文面からわかることは、次のようなことです。

- 1。人はそれぞれの心の中にひとつの部屋を持っている。
- 2。この小さな部屋を人々は共有するように持っている。
- 3。その限りにおいて、人は孤独ではない。
- 4。その部屋は、一人になって、深呼吸をして、自分自身を恢復することのできる場所である。
- 5。この部屋は、その中で永遠に語り合える部屋であり、従い、過ぎて行く時間の無い空間であるとも考えることもできる空間である。或いはまた、そのような果てしない時間を含む空間であるとも考えることができる空間である。

次に部屋との関係で窓に映じる反照を見てみましょう。上の引用の直前に次のような言葉あります。

「どうか、こんな「時知らず者の徘徊」を御許し下さい。やがてきつと、あの美しい反照が、ディオニュソスを復活させる事でせうから。」

この箇所を読みますと、安部公房は、『ツァラストラはかく語りき』の他にも、『悲劇の誕生』をも読んでいたことがわかります。

また、ここで言われている反照は、この書き方からして、既に何度も親しく中塾肇に向かって語ったことのある言葉なのだということが推測されます。

さて、そうだとすると、ここでは、「美しき反照」とあり、反照は美しいものとして語られていますが、他方、上に引用した中塾肇宛の文面の直ぐ後に続く『反照』と題した詩では、反照は「悲しき反照」として歌われて、次の様な詩の第1連の一部を構成しています。

「きみ みずや
悲しき彼の反照を

答えしは ながともならず
そは おのが声
もだして すぎぬ」

これを読みますと、反照は、「ながとも」、即ち長い交流のある友ではなく、「おのが声」、即ち自分自身の声であったということが歌われています。

反照は、自分自身の声であった。それが、友の声ではなかったことが、やはり悲しい反照ということの意味なのでしょう。

この自分自身が、実は反照であるという認識は、第2連において更に明かされています。

「さればとて
おのが すがたを
かの反照を
かへり見ずして
いかでかすぎむ
きみ愛せずや」

ここで言われていることは、部屋の中で窓に映じる反照は、自己の反照であって、それを顧みる事がなければ、君と呼ばれる相手（他者）をも愛することができないという考えです。

これは、実に独特の考えだという以外にはありません。まづ他者との交流に、それぞれのこころの部屋を想定し、その部屋には一個の窓があり、そこから見える、或いはそこに映じる物事の姿は、自己のこころの、また姿の反照であるというのです。

10代の安部公房の詩の中に出て来る反照を、もう少し見てみましょう。

『神話』と題した詩があります（全集第1巻、86ページ）。

この詩の第一行には、アポロンの名前が出て来ますので、上にみた中塾肇宛の文面に出て来るディオニュソスという神の名前を併せて考えると、反照という概念は、いつもニーチェの『悲劇の誕生』に書かれているふたつの対になった神々と関係して思考されているということがわかります。この詩の最後の連を引きます。

「おゝされど 神々よ
今一度ふりかへり給へ
我胸にやすらふ神話に
最後の別れを告げ給へ
今はすでに彼の
恐ろしき反照にこがされたる
人の心をあはれみつつ」

その反照が、ディオニュソス神との関係では、美しく、アポロンとの関係では、「恐ろしき反照」と言われています。ですから、反照という概念は、アポロンのような明朗な理性的な神との場合には、美しく、他方、ディオニュソスという情動の混沌を招来する神との場合には、恐ろしいと、10代の安部公房は考えていたことがわかります。この詩は、安部公房が『悲劇の誕生』をどのように理解したかを考えるときの資料となることでしょう。今はこの問題にはこれ以上は触れず、後日の課題と致します。

さて、『没我の地平』という詩集の中的一篇に、「主観と客観」と題した詩があり、ここにも反照が出て参ります。その第2連を引用します。

「されど物問ふ唇に
黙して傾ぐ愛の眼に
返り叫ぶ君がさゝやき
姿見の照り返し
夕辺に満てるあられなの
吾が在り様（やう）の夢と夢」

実は『神話』という詩にあってもそうなのですが、そこでは「彼の神々の間

隙を見つめ給へ」と歌い、この『主観と客観』においても、「木の間木の間」に」と第1連では歌っていて、間隙、隙間、間という空虚な接続の場所が、既にこのとき安部公房の思想に胚胎していることを読み取ることができます。

『神話』という詩では、神々も、その間隙（それは、同じ詩で網とも別名で呼ばれている）に捕われて、天上へ帰ることができず、またこの『主観と客観』という詩でも、空虚な陰画である木の中に吾は存在していて、踞（うづくま）っている。それを「吾が在り様のことはりよ」と第1連の最後に歌われています。

さて、第2連では、この連を読むと、そのような木の中に孤独にいる吾が見る姿見（鏡）の反照を、「返り叫ぶ君のさゝやき」として読む吾がいます。

その主観のありようを最後の一行では、「吾が在り様（やう）の夢と夢」と歌い、姿見という鏡に映る吾が姿の在り方は、夢であり、反照も夢であると歌っている訳です。そうしてみると、反照とは、ここでは、見る主観に対して、客観ということができるとでしょう。主観も夢、客観も夢というわけです。

また重要なことは、この詩は、10代の安部公房が既に自己参照的、再帰的な人間であることを歌った詩でもあるということです。窓を、ここでは鏡とっていて、そこに映る反照は、また自己の姿だということです。この考えは、安部公房の終生の考えでした。安部公房は再帰的な人間なのです。

同じ『没我の地平』に「光と影」という詩があります。その第2連を引用して、見てみましょう。

「それ自らは存在し得ぬ
尚ほそれ自らの
暗合の悲歌をお前の胸に
無名のまゝに取もどせ
総ての郷愁に先立つて
おゝ かの反照の夕日さす

牧場（まきば）の斜面に口付けよ」

第1連では、手や胸からその名前を奪い取って、人間が無名であることに徹すること、従い四季の周期とは無縁に生きることが歌われています。

その上での第2連ですので、その無名の我れの胸にある悲歌は暗合で書かれていて、その秘密を読み解く事は、普通にはできないのです。無名である人間だけが、無名のままに解読することができる。そして、そこは、またその行為は、郷愁以前の場所であり行為である。その場所に、反照の夕陽が射すのだと歌っています。

その反照の射す場所を、この詩では牧場と言っています。

こうして見て参りますと、安部公房の部屋又は部屋に相当すると安部公房が考える、自己に一番身近な空間は、無名の自己が存在する場所、それを中埜肇宛書簡では、心の部屋と呼んでいたと理解することができます。この部屋に居る自己は、従い、自然の四季の周期とは無縁の、時間の中に存在しない、それ故に中埜肇「時知らず者の徘徊」と呼んでいるように「時知らず者」としての自己があるということなのです。

これが、安部公房の部屋です。

そうして、そこには主観の思いを映した窓があり、反照があり、その反照も夢の客観であるということになります。

『〈静かに〉』という詩があります（全集第1巻、124ページ）。その第2連は次のようなものです。

「静かに あんな静かに
誰が来るのだ
白い手が黄昏（たそがれ）の中で私をまねく
死が別離が……
泣き乍ら私の夢が暮れて行く

白い 小さな部屋の中で
たった一人うづくまつたまゝ」

やはり、部屋の中には一人で、孤独にいるのです。

さて、そのような部屋に居る安部公房にとっては、その空間に居るだけでは友人を含めた他者との交流をすることはできないことでしょう。それを一体どうやって可能ならしめるのか、それが次の課題です。

安部公房が20歳のときに書いた論文に『詩と詩人（意識と無意識）』という論文があります。これは、以上のように詩作をしながら、他方哲学の世界で思考し続けた安部公房の思想の集大成となっている、重要な論文です。これを読むと、10代の安部公房の書いた詩や、また『無名詩集』の詩の意味が非常によく解ります。言わば、10代の安部公房の詩と散文の理論篇という位置に、この論文はあります。また、そればかりではなく、20代以降に安部公房が諸作品を創作するときの理論的な基礎となっております。

この論文は様々な角度から読み解くことの出来る論文ですが、今、部屋とその関連する用語と概念との関係で読むとすると、一言で言って、この論文は、夜について書いてあるのだと言う事ができます。夜という観点から、夜という言葉キーワードにして、この論文を横断してみましよう。

この論文は、人間の在り方を徹頭徹尾思考の中心に据えて、こころの部屋、窓、窓に映る反照、真理、主観と客観、轉身（詩人の自己否定による次元展開）、自己承認（次元展開に伴う夜の自己開示性）、そして、夜について論じた論文です。

この論文に書かれている詩人の姿こそが、安部公房独自の実存の考え方なのです。

この場合、安部公房の考えた人間と物事の在り方は、次の様になっています。

- 1。人間のこころは一個の部屋である。或いは、こころの中に一個の部屋がある。
- 2。その部屋には窓がひとつある。（安部公房の窓については、既にもぐら通信第3号 (<http://goo.gl/6YoXiX>) にて詳細に論じましたので、その号をお読み下さい。）
- 3。その窓から外界の形象がみえる。
- 4。この窓は、人間の在り方である。
- 5。従い、窓から見える形象は、外界にあるものの形象ではなく、その人間の在り方の反照であり、そのこころの反照たる形象である。
- 6。その形象の意味は、夜の示した意味である。
- 7。「これを深くみつめた時、実は吾等の魂に、あの心の部屋に、云う可からざる急激な転身が突如として始まる」。
- 8。それによって、部屋の四囲の壁は消失し、壁は夜の一部となり、「宇宙は闇の中に浮遊し乍らも、吾等と何んのへだてもなく対立することに」なる。
- 9。そして、この暗闇に星が輝いているのがみえる。
- 10。星の輝きが見えるのは、闇夜であり、夜があるからだ。
- 11。「世界は夜に繋がって無限であり全体である。」
- 12。そのような人間の在り方は、自然とより高次の展開を目指して「自ら次元を上へ上へと乗り越えて、限りなき円を廻転し続ける。」
- 13。「夜も世界も、展開に於いて次元から次元へと転身する行為に於て、その行為者のみが触れ得るものなのである。」
- 14。「そして夜が、一瞬に於てその体験的現存在の直覚として捉えられた時、その一瞬に於てこそ、彼の果てしなく繰返して止まなかった世界内＝在（筆者註：世界の内部に存在する我）と世界＝内在（筆者註：私の内部に存在する世界）とは、止揚されて、人間の在り方としての純粋な世界内在（筆者註：世界内＝在と世界＝内在の統合概念）となるのだ。」
- 15。「世界内在は最早個々の単語の組み合わせではない。此処に於てこそ RilkeのDinge（筆者註：複数の物、英語のthings）は、永遠の客観性を持つのである。世界内在とは一瞬に於ける夜の具体的な直覚である。悲しき反照の対立（筆者註：個々人の窓に映る反照の対立）は消え去って、言葉無き夜が身近にせまり、肉体を押し包む永遠の一瞬なのだ……。」この「永遠の客観性」を備えた客観を、安部公房は第三の客観と呼んでいます。

轉身とは、安部公房独自の哲学概念の用語です。世界内＝在（自分が世界の内側に存在すること）と世界＝内在（自分の内側に世界が存在すること）を交互に交換して、より高次に次元展開をすることをいいます。この場合次元展開の方向は上と下と両方が考えられています。その究極の次元展開の果てに、第三の客観が出現し、そこに至り、世界内＝在と世界＝内在が統合されて一つになり、永遠の客観性を持つことになり、そこに夜が現れ、夜の直覚が「単なる概念ではなく、行為・体験・方法の中に現実的な姿を現す」こととなります。

しかし、轉身の契機が夜であり、また轉身という次元展開の果てに至る究極の場所に、また夜が現れるという以外には、安部公房は夜が何であるかはいうことができません。ただ、夜はこのような人間の在り方だというのみです（全集第1巻、113ページ下段）。

「夜は此の部屋に満ちる空気である。総てをかくあらしめるもの、それが夜である。」（全集第1巻、112ページ下段）従い、夜は、「夜という名のもとに象徴された」何ものかです（全集第1巻、112ページ上段）。

この論文の題名の括弧の中の副題から言えば、夜とは無意識のことだと断じて、よいと思います。しかし、この無意識が何なのかを、安部公房は夜という言葉を使って執拗に言わずにはられません。

さて、これが、夜を一種の媒介者にして生まれる他者との交流の思想なのです。この思想の中に、夜の中に、部屋、窓、反照、自己承認があるのです。

この論文には、自己承認という言葉が頻出しますので、自己承認という言葉をもう少し詳しく見てみましょう。これが理解できると、一層よく他の3つの用語との関係も理解できることでしょう。

全集の第1巻を読みますと、自己承認という言葉の出て来る散文作品が3つあります。

1. 『詩と詩人（意識と無意識）』（全集第1巻、104ページ。1944

年、安部公房20歳)

2. 『〈没落の書〉』 (全集第1巻、140ページ。1944年、安部公房20歳)

3. 『〈様々な光を巡って〉』 (全集第1巻、202ページ。1947年、安部公房23歳)

まづ、自己承認という言葉が一度だけ出て来る『〈様々な光を巡って〉』での、この言葉の使いかたを見てみましょう。

「十九世紀は気候の変化の激しい世紀だった。人々は衣裳の持つ意味を学び知った。二十世紀は更に激しい世紀である事を、最初の鐘が告げている。人々はもう衣裳の力ではどうにもならない事に気付き始めた。言わず語らず、人々は忘却を夢見た。自己承認の為には、それを自分の誇りにしなければならぬ。」 (全集第1巻、202ページ)

この文面を読むと、安部公房は、自己承認という言葉と忘却という言葉との関係で考えていることがわかります。

忘却と言え、それはそのまま、夜が到来して、部屋の壁が取り払われ、夜の中で繰り返し自己放棄による次元変換、次元展開がなされ、その度毎に、自己と周囲を忘却し、その過去が存在象徴として、究極には第三の客観として眼前に浮かんで来ることを待つ、その忘却ということです。

安部公房は、『詩と詩人 (意識と無意識)』において、詩人が果てしない次元展開の果てに見る事のできる第三の客観を、「次元段階の究極の反照」と呼び、それを「心の裡に保ち続けなければいけないのだ」と言っています (全集第1巻、111ページ上段)。

この第三の客観、即ち究極の反照を観る事が、自己承認という、安部公房の言葉の意味なのです。第三の客観、究極の反照を観ることができたら、詩人は自己を承認することになるという思想です。他者が詩人の自己を承認するのではない。詩人が窓に映じる究極の反照を観ることができたときに、それが客観の自己での姿であり、その姿を認識することができたら、それが自己が自己であることの承認、自己の証認になるという考えなのです。

さて、また、この論文で次のように自己承認について書いています。

「夜が夜と言う名のもとに象徴されたと言う事は単に吾等の解釈であって、それは自己承認とも名付く可き真理性への没落の慾求が、夜の表皮たる理性の力をかりて表現したものに他ならぬ。此の自己承認こそは人間の在り方の倫理的表現に他ならぬのであるが、決して価値に支配されるものではなく、むしろ価値の生産者たる価値以前のものであり、当然自己満足、自己充足、幸福等と言うものからは厳密に区別されねばならぬものである。自己承認は行為ではなくして行為の法規である。

実存の日常性、即ち現存在の優位はハイデッガーも説く所であるが、その日常性が純粹に取上げられて生存者の選択性を其の本質に於いて展開した時、そこに在るのがその自己承認なのである。私の言う自己承認とはかかる性質のもので、常に行為の本源迄次元的にさかのぼり、無意識、非理性の裡に捉えられるべきものであり、況や心理的な解釈等は全く不当なものである。

かく見る時、此の自己承認こそ正に夜の自己開示性・内在性・有性格性であって、其処には真の体験的把握がある以上、循環交互作用による否定は適用され得ないのである。かくて夜の体験者たる自己が存在論的優位に置かれている事は明らかになった。」

この文章を読んでわかることは、次のようなことです。

1. 自己承認は、真理性への没落の慾求であること。
2. 自己承認は、価値の生産者であり、創造された価値以前にあること。
3. 自己承認は、行為ではなく、行為の法規であること。
4. 現存在に（今ここにこのように）生きる人間が、「選択性を其の本質に於いて展開した時、そこに在る」ものであること。
5. 自己承認は、「常に行為の本源迄次元的にさかのぼり、無意識、非理性の裡に捉えられるべきものであ」ること。
6. 自己承認は、「正に夜の自己開示性・内在性・有性格性であって、其処には真の体験的把握がある以上、循環交互作用による否定は適用され得ない」ものであること。

このようなことになるでしょう。

安部公房の考えている次元変換（又は次元展開）は、上方と下方へのふたつの方向性を同時に（同時にとは何か？です）備えています。この場合、自己承認は、真理性への没落の欲求とある以上、これは、18歳のときに成城高校の校友誌に投稿した『問題下降に依る肯定の批判』の延長にある考えであることがわかります。この論文ではまだ外部と内部の接続は静態的な接続であって、それらの交換は考えられておりません。初めて安部公房が外部と内部の交換を考えるのは、19歳のときに書いたエッセイ『〈僕は今こうやって〉』を待たねばなりません。その基礎の上にある『詩と詩人（意識と無意識）』の、上の自己承認の理解なのです。

さて、こうして見ると、安部公房は、自己承認とは真理性への没落であり、これは、「常に行為の本源迄次元的にさかのぼり、無意識、非理性の裡に捉えられるべきものであ」といっていることに着目すべきでしょう。

この理解はやはり、上で忘却という用語について考えたように、夜の中で繰り返し行われる次元変換の下降方向への次元的展開を念頭においております（勿論同時に上昇方向の展開も行うわけです）。

この下降へ向かう次元変換については、『〈没落の書〉』に、それがいかようなものかが書かれています。次元変換を山に譬（たと）え、山頂に登ることと、山を下ることと、人々が自己承認を求めて、これに急き立てられて、これらの二つのことの間で翻弄される姿を皮肉を以て書いております。

そして、ここでも、自己認証の本質を知るのは、やはり月の夜の出来事として描かれています。夜に真理を知ることができるのです。真理を夜に、月の光の下で知るというのは、如何にも安部公房らしい。冒頭に引用した小学生のときに書いた詩を参照して下さい。普通真理は太陽の下で知ると言われるのではないかと思います。そうではなく、夜であり、月の光の下であるということが、安部公房です。

いづれによせ、この『〈没落の書〉』を書いた安部公房は、その題名の通り、下降方向の次元展開を行うことを決心して、自己承認を得るための、これを没落と呼んでいるのです。

具体的にこれは何かと言えば、日常の中、時間の中で現存在であること（今ここにこうしてあること）を大切にしながら、詩人としての次元変換をし、自己を放棄して（外部と内部の交換）、存在象徴が再現されるのを見ることによる創造の道を行こうということなのです。

自己承認は、「正に夜の自己開示性・内在性・有性格性であって、其処には真の体験的把握がある以上、循環交互作用による否定は適用され得ない」ものであるという安部公房の自己承認の理解を読みますと、これはやはり夜が到来して、部屋の壁が消失し、外部と内部が交換されて、夜が自己を開示したときに、同時に、主観である私の自己開示がなされると読むこととなります。夜の自己と主観の自己とが一致するのです。従い、ここには、それまでなされて来た上昇と下降の「循環交互作用による否定は」当然のことながら、なされない、そこで究極の反照、即ち第三の客観を観るということになるのです。

安部公房のいう自己承認とは、このような概念なのです。

小学生のときの部屋では、自己承認してくれるのは、窓に、いや窓を通してカーテンに映じる夜の月の反照でありましたが、その月夜が、ここまで大きな哲学的展開をし、長足の進歩を遂げたわけです。安部公房は、自分の頭で自分独特の世界を考え続けたのです。

安部公房は、中埜肇宛書簡第1信（全集第1巻、68ページ）で、次のように書いています（1943年、安部公房19歳）。

「僕は今、受動的自己証認に於ける、而してそれにより開示される所の人間の（主観的—観念以前）特殊性について、又その立ち場より考査される所の新価値論とも云ふべきものの体系、若しくは方法に思考を集中しています。そして晩秋、濡れた地面に降る雪の様に、後から後からと消えて行く思想を、愁しい気持ちで眺めやつて居ます。」

この「新価値論」が、20歳のときにまとめあげた『詩と詩人（意識と無意識）』なのです。

この手紙の文面を読むと、自己承認とは、確かに夜の到来とともに行われる、夜という絶対的な何ものかのもたらすものである以上、法規と呼ぶに相応しい、そのような意味では確かに受動的な自己証認ということになるでしょう。

この手紙を読むと、安部公房は中埜肇に対して繰り返し、上で読み解いて来たようなこの「新価値論」の思想を語ったものと思われます。

以上が、部屋、窓（こころの鏡を映す窓）、反照、自己承認の用語と概念であり、これらの4つの言葉の関係です。

さて、『詩と詩人（意識と無意識）』を読むと、安部公房の創作原理は、外部と内部の交換、即ち次元変換又は次元展開であることがわかります。

部屋を巡る4つの言葉の関係を考えると、安部公房の世界には、次の3つの交換があり得ることになります。

- (1) 自己の内部と外部の交換：『〈僕は今こうやって〉』（19歳）
- (2) 夜の到来によって起こる、自己を含む空間（部屋）とその外部（宇宙）の交換：『詩と詩人（意識と無意識）』（20歳）
- (3) 『問題下降に依る肯定の批判』において18歳の安部公房が閉鎖空間（「蟻の社会」）と断じた社会の内部と外部の交換。この交換には、以上(1)と(2)を含んでいる。

安部公房の世界を一言で言うと、これら3種類の内部と外部の交換のなされる世界だということになります。

この個人のこころの部屋という空間と、社会という閉鎖空間を一致させることができる瞬間が、夜の到来であるということになることは、上述した通りです。そのときこそ、そのときにだけ、安部公房の主人公は後者、即ち社会という閉鎖空間から失踪者として脱出が出来るのであり、個人の部屋も夜に浸潤されて、他者との通路が開けるのです。そうして、そのときに同時に（同時にとは何かです）、社会の内部と外部も交換され、新しい世界が生まれる。これが安部公房の考えた論理です。

この論理と、そして部屋、窓（自己を映す鏡）、反照、自己承認が、どのようにその後の小説の中に書かれているかをみることは楽しい仕事でしょう。

『砂の女』では、次のようなテキストがあります。

「（ラジオと鏡……、ラジオと鏡……）一まるで、人間の全生活を、その二つだけで組み立てられると言わんばかりの執念である。なるほど、ラジオも鏡も、他人との間を結ぶ通路という点では、似通った性格を持っている。あるいは、人間存在の根本にかかわる欲望なのかも知れない。いいとも、向こうに着いたら、ラジオくらいすぐ買って送ってやるよ。あり金をはたいて、最高級のトランジスターでも買ってやる。」（全集第16巻、219ページ上段）

『他人の顔』の主人公が、手記を書くために部屋を借りることについては、言うまでもないでしょう。

自己承認という言葉は、例えば『燃えつきた地図』では、資格という言葉に変わって、社会の中での個人の在り方を論じる鍵の言葉となっています（全集第21巻、273～274ページ）。

『箱男』の箱男は、最後に闇夜の中で脱出を図ります。きっと箱男も失踪したのでしょう。その象徴として、最後の一行は、救急車のサイレンの音で終わっています。

この作品で、箱という部屋、窓、自己の反照である外界、自己承認の問題が書かれていると言えることは、言うまでもないことでしょう。

『密会』は、失踪の象徴である救急車のサイレンで始まり、話の幕が上がります。この話の最後では、やはり主人公は闇の中で、再帰的な「一人だけの密会」を閉鎖空間のなかで行います。この最後の場面では、窓（自己を映す鏡）に相当する役割を演じているのが、盗聴器のマイクです。そうしてみると、副院長の馬は、主人公の反照、主人公の自己の客観的な夢であるということが出来ます。さて、そうして最後の最後には、やはり自己承認の問題が、「明日の新聞」との関係で言及されています。

「いくら認めないつもりでも、明日の新聞（原文傍点）に先を越され、ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に死につづける。やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」（全集第26巻、140ページ）

『方舟さくら丸』の最後の場面には次の様な一行があります（全集第27巻、441ページ上段）。

「「愉快だね、この人」昆虫屋は探るように一同を見回し、ほんの一瞬、考え込む目付きになった。「でも、しょせん夢物語さ。拝んだって、頼んだって、誰が《代表棄民王国》を承認したりするものか」
「分っていないね。いや、失礼しました。御破産の時代に入るんだってこと、お忘れにならないで下さい。自分で自分を承認すればいい時代です。新時代なんですよ」」

『カンガルー・ノート』から、自己承認の考えと意識が可笑しい対話になっているところを引用します（全集第29巻、119ページ下段から120ページ上段）。

「「無断じゃいけないのかい？水路ぞいに来たから、事情が分らないんだ。管理事務所は何処にあるの？後で了解をとりに寄ってみるよ」
「いま回数券を買ったら？」
「あいにく持ち合わせがないんだ。事務所で借用証にサインするから……」
「小父さん、職業は？」
「君こそ何なんだ？未成年だろう？労働基準法違反じゃないの？」
「おれは、小鬼さ。労働基準法なんて関係ないよ」」

このように主要な小説を一寸覗いてみても、安部公房が10代でみた宇宙のヴィジョン（vision）を、どのように散文の世界に展開をしているのか、あの4つの用語と概念を考え続け、それを言語によって形象（イメージ）化したのか、誠に興味深いものがあります。

こうして主要な作品をざっと眺めても、どうも最後には、あの夜、安部公房の部屋の壁を取り払い、外部と内部の交換が生動して、果てしない次元変換

が第三の客観を、究極の反照をもたらす夜が、到来するようです。そうして、その闇の中で、夜の自己開示の瞬間に、失踪という脱出劇が行われる。

安部公房は、10代で至った部屋という空間にまつわる主題を繰り返し変奏したのです。

安部公房が、部屋の中から窓に映じる自己の反照を観ている写真を一葉示して、この文章の掉尾を飾り、話を終ることに致しましょう。

小さな子供のころから、終生変わらずに、安部公房は、このようにものを考え、このようにものを観ていたのです。自己のこころの部屋からその窓に映る外界の反照、即ち自己の反照を、再帰的な人間として。



ポラロイドカメラの梱包されていた梱包材の枠を窓に変形させた安部公房
(『安部公房とわたし』(山口果林著)より)

次回は、安部公房の鏡を論じます。



前号の訂正箇所

前号に誤記がありましたので、改訂致します。

第15号 P38 16行目 「多国語」のところ、正しくは「外国語」でした。



投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしょう。

編集部一同、こころからお待ちしております。

読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。

メール配信担当：岡篤史 (wlallen)

大熊宏俊様より

岡篤史さま

もぐら通信第15号、拝受しました。早速にお送りくださり、ありがとうございました。わくわくしながらPDFを開いてびっくり。質量とも大変なボリュームに圧倒されました。少しずつ、ゆっくり読ませていただくことに致します。今後とも、よろしくお願ひします。

なお、ツイッター「H. OKADA/安部公房ニュース&ファン」をフォローさせて頂きました。こちらの情報も楽しみにしております。

大熊宏俊

荒井孝彦様より

岩田英哉様

- ・もぐら通信のコロンビア大学の図書館収蔵
おめでとうございます。

安部公房の作品同様、それを研究される方の文章も記憶の財産だと思いますので、今後このような形で図書館研究機関に収蔵され、多くの方々に読まれる機会ができること広がることを一読者として願っております。

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思ひます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

- ・テアトロの安部公房の特集記事につきましては、演劇界が没後20年なのに安部公房を取り上げることが寺山と比べて少なく不満に思っていたため、何故か少しだけホッとしました、読むのを楽しみにしています。
- ・辻井喬さんがお亡くなりなされたことにつきましては、深く悲しい衝撃を受けました。
経済人としての堤清二さんとしてメセナ活動で演劇界に対しても多くの支援をいただきました。
私個人として生きておられた最後のお姿を見たのは、2年前の北欧の映画祭で安部公房原作の映画「友達」の上映後のトークに出られたときで、その時に安部公房との思い出を語られたことをしっかり覚えています。
今回の公演にご招待したいと願っておりましたのでお亡くなりになられたことはとても残念です。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

内藤由直先生より

もぐら通信編集部御中

いつもお送りいただきありがとうございます。

日本近代文学館や国会図書館、コロンビア大学図書館にまで収蔵されるとはすごいですね。

学生たちにも紹介したいと思います。

また来年もお送りいただければ幸いです。

取り急ぎ御礼まで。

そのほか堀田倫子様、加藤 真様よりご感想などをいただきました。

【合評会】

諸般の事情から、第15号の合評会はできませんでした。第15・16号の合評会を1月に「もぐら通信掲示板」にて開催する予定です。：<http://8010.teacup.com/wlallen/bbs>

読者の参加をお待ちしています。

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、大江健三郎様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、
コロンビア大学東アジア図書館



【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解説工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://wlallen.seesaa.net/article/381739981.html>

編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

「諸々を 積み残してや 歳明くる」
時間は残酷である。が、時には救いとなる。
それでもやりきれなかった諸事は心残りだ。
そして、新しいニュースは無心に次々やってくる。
新潮社『考える人』の「安部公房の書齋」は私の心を揺さぶる。
扉写真の「蕨のからんだ玄関のポスト」の下方には、これはもぐらを形取っているではないか。安部がにやりと笑みを浮かべながら人を下から迎えているかのようだ。
書齋の本棚を目をこらして見る。どんな本を読んでいたのか。だが、見えそうで見えない書名。どうも、写真を撮った人の関心と私の関心とははずれがあり、それがもどかしい。
棚の全集のような揃った本はどうでもよい。机の上に積み上げた雑多な本の数々、それを見たい、知りたいのだ。
私の心を積み残したまま、別の残像を数枚の写真は広げていた。
そう、家は取り壊されてこれらは残像でしかなくなるのだ。

[OKADA HIROSHI]



さあ、2014年が始まりました。昨年、体調不良で原稿提出や編集作業で、他の編集部に迷惑をかけたこともあり。今年は、そういうことのない一年であるよう心掛けたいと思います。

昨年はあたたかい寄稿者、読者、支援者のおかげで、誌面も充実し、新聞記事に掲載してもらえなど、もぐら通信にとって大きな飛躍の年でありました。今年も更なる成長を遂げるべく、一歩ずつ前進していきたいと思えます。

話は変わりますが、ニンテンドーDSiが故障したので、思い切ってニンテンドー3DSを購入しました。中古品ですが、美品だったのでラッキーでした。眼が悪いか、立体像を見るのがしんどいので、大体2D表示しています。

今は、「スーパーダンガンロンパ2」(PSP)と「逆転裁判5」(3DS)を楽しんでいます。今年もゲーム漬けの年になりそうです。編集と執筆に差しさわりのない程度に楽しみたいと思えます。

「私の読書遍歴」で書いたとおり、とうとう安部公房全集全30巻を揃えることができました。半分くらいは持っていたので、持っていない巻は図書館で借りていましたが、その労苦からやっと解放されました。ますます、安部公房ワールドにはまっていきたいと思えます。

では、みなさんの一年が、よい一年であることをお祈り申し上げます。

[w1allen]

はや歳の暮れとはなりぬ。●京都でのKAPの読書会の翌日、胃痛で苦しみました。超音波を腹にあてて写真を撮ると、胆石だということがわかりました。胆嚢に石が出来て、七転八倒したわけです。全面的に炎症を起こしてメスを入れるのが難しいし、また胆石だけをとってもまた同じことになるというので、胆嚢ごと摘出するというのが医者の判断。来年草々1月に手術の覚悟です。●John Frameという人の「Battle of Symbols」というキンドル本を買って読みました。この題名にある発想はいいのに、内容がもうひとつの足りない。引用の多いのは問題ではないとしても、やはり引用によって、その人の思想、考えがうまく伝わらないで、ただの博識だけになっているのが隔靴搔痒であるなあ。●アイヒェンドルフの「我はアルカディアに在りぬ」というファンタジー小説(短編)を読む。Zum Goldenen Zeitalter (黄金の時代精神亭)という名前のレストラン(居酒屋)が、そのままヴァルプルギスの夜に、ブロッケン山に繋がっているという舞台設定で、不思議で面白い小説だった。今で言うならば、スラップスティックの場面の横溢した小説。こんな新しい小説を18世紀の終り、19世の始めに書いていたとは●今年もよい歳でありますように。

[タ克蘭ケ]



【編集後記】

冒頭の新年の挨拶、いかがでしたでしょうか？今年
は、編集部員3人の似顔絵を掲載してみました。なか
なか、よく似たものが出来たと自負しています。今
号は、ニュース&記録が沢山ありました。中でも、
仙川の安部公房の家が取り壊される話は、何とも残
念な気持ちになりました。また、新発見のテキスト
や初出不明だったエッセイの初出が判明しました。
また、何と言っても、正確な共産党除名日が判明し
たのが、最大のニュースでした。また、2013年の安
部公房重要ニュースともぐら通信重要ニュースをま
とめました。思い返すと、激動の没後20年であり、
もぐら通信にとっても大きな飛躍の年でした。12
月は、KAPとTAP、それぞれで読書会が行われ、師走
の気ぜわしい中、安部公房談義に花を咲かせた方も
いらっしやると思います。稲垣健さんの二度目の寄
稿は、幅広く安部作品のラストに触れながら、「文
学の力」に迫っています。滝口健一郎さんとの往復
信では、寄稿者と編集部との対話を読め、楽しいも
のになりました。これからも、寄稿者との縁を大事
にしていきたいです。本年も、もぐら通信をご愛読
していただければ幸いです。

[w1allen]

差出人：
廣安部公房〒182-0003東京都調布市若葉町
「閉ざされた
無限」次号の原稿締切は1月24日（金）です。ご寄稿
をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『密会』の都市論：OKADA HIROSHI
2. 『R62号の発明』小論：w1allen
3. もぐら感覚19：鏡：タクランケ
4. 安部公房の変形能力16：まとめ：岩田英哉
5. その他のご寄稿

総目次（創刊号—第15号）

もぐら通信総目次・索引(<http://w.livedoor.jp/w5allen/>)で、同様のものが閲覧できます。wikiでは、毎号ごとに更新します。（ご注意：運営会社の都合で、1/15にURLが変更される予定ですが、自動的に新しいURLへと誘導されるようになっております。）

創刊号 2012年9月30日発行

1. 安部公房の愛の思想—序論：HIROSHI OKADA … page 2
2. 私の中の安部公房 : wlallen … page 5
3. もぐら感覚 : タクランケ … page 6
4. 18歳、19歳、20歳の安部公房（連載第1回）：麿岩田英哉… page 9

第2号 2012年10月31日発行

1. 安部公房の生涯 : wlallen … page 2
2. 安部公房ゆかりの地、旭川を訪ねて：岩井枝利香… page 3
3. 「デンドロカカリヤ」の同時代性—戦後の植物—：富士原大樹 … page 6
4. 「砂の女」について : 柴田重宣 … page 8
5. 安部公房記念館を構想する：HIROSHI OKADA … page 11
6. もぐら感覚4（触覚） : タクランケ … page 14
7. 安部公房誕生の秘密 ～安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読み解く～：岩田英哉 … page 18
8. 18歳、19歳、20歳の安部公房（19歳、20歳の安部公房）：麿岩田英哉… page 23

第3号 2012年11月30日発行

1. 東鷹栖安部公房の会結成 … page 2
2. もぐらの安部公房／友田義行 … page 4
3. 安部公房、映画に行く—ルイス・ブニエルの「忘れられた人々」／頭木弘樹 … page 5
4. 『燃えつきた地図』について／清末浩平 … page 11
5. 安部公房の愛の思想2／OKADA HIROSHI … page 15
6. 『鉛の卵』小論／wlallen … page 18
7. 安部公房の変形能力／岩田英哉 … page 19
8. もぐら感覚5：窓／タクランケ … page 25
9. 安部公房の未発表作品「天使」を読んで／Mian Xiaolin … page 33
10. 「天使」を読み解く／岩田英哉 … page 35
11. 18歳、19歳、20歳の安部公房／麿岩田英哉 … page 38

第4号 2012年12月31日発行

1. 安部公房異聞：池田龍雄… page 2
2. マルテの手記と安部公房：Mian Xiaolin … page 7

3. 名付けるという行為—安部公房における匿名性：田邊栞 … page 10
4. 私論 安部公房「天使」：岩井枝利香 … page 12
5. 放送ライブラリーで安部公房ドラマを楽しもう！：ホッタタカシ … page 17
6. 『第四間氷期』小論：wlallen … page 24
7. もぐら感覚・手：タクランケ … page 27
8. 安部公房の変形能力2・エドガー・アラン・ポー：岩田英哉 … page 32
9. 『R62号・鉛の卵』を読んで：Mian Xiaolin … page 37
10. 18歳、19歳、20歳の安部公房：鷹岩田英哉 … page 40
11. ご寄稿について… page 45

第5号 2013年1月31日発行

1. お知らせ…page2
2. 『壁』の手前：加藤弘一… page 3
3. 三木富雄と「他人の顔」映画セット作品によせて：吉田稔美 … page 6
4. 「詩的発明家—安部公房」と「懐かしの安部公房」：池田龍雄 … page 9
5. 安部公房の写真：marmotbaby … page 12
6. 安部公房の「窓」：宮西忠正 … page 16
7. 「闖入者」論：岩本知恵 … page 18
8. 「長屋談義」：OKADA HIROSHI … page 27
9. 文献検索術：wlallen … page 29
10. 「アベ・コーボアのインボウ」：トクメイ デカK … page 32
11. 国立近代美術館「美術にぶるっ！」展を観て：岩田英哉 … page 35
12. 鷹岩田英哉氏の「20歳の安部公房」を読んで：Mian Xiaolin … page 38
13. もぐら感覚7：透明感覚：タクランケ … page 45
14. 安部公房の変形能力3：ニーチェ：岩田英哉 … page 54
15. 安部公房の詩を読む：鷹岩田英哉 … page 72

第6号 2013年2月28日発行

1. お知らせ
2. 「安部公房」に缶切りを！—安部ねり&加藤弘一トークライブ報告：ホッタタカシ… page3
3. 『友達』公演までの道のり：奥村飛鳥… page8
4. 戯曲『友達』稽古場訪問記：編集部岩田英哉… page16
5. 現実生活にあらわれる「安部公房現象」について：滝口健一郎… page21
6. 安部公房短編集に見る愛の思想：OKADA HIROSHI… page22
7. 「デンドロカカリヤ」の引用の深み：富士原大樹… page28
8. 安部公房—技術と芸術が再会する場所：wlallen… page31

9. 貼りついた未来の皮膚：竹知佑輔... page33
10. TAP(東京・安部公房・パーティ)ミーティング報告：しめじ... page36
11. 安部公房に捧げる歌：睡蓮... page40
12. もぐら感覚：笑い：タクランケ... page42
13. 安部公房の変形能力4：リルケ1：岩田英哉... page49
14. 安部公房の詩を読む2：贗岩田英哉... page58
15. 「もぐら通信」を読んで：ロータス... page65

第7号 2013年3月31日発行

1. 表紙ニュース... page1
2. 目次... page2
3. 旭川訪問記：w1allen... page3
4. 戯曲『友達』を観る：編集部岩田英哉... page8
5. 『友達』問答：ホッタタカシ... page11
6. 何十年ぶりで初恋の人にあつたかのような読書会：番場寛... page25
7. 『燃えつきた地図』について：w1allen... page29
8. 『燃えつきた地図』の構造：岩田英哉... page30
9. MEMO「安部公房現象2」：滝口健一郎... page34
10. 続 安部公房の写真：marmotbaby... page35
11. 『終りし道の標べに』覚え書き：ロータス... page42
12. 安部公房の都市論一愛の思想(4)：OKADA HIROSHI... page44
13. 安部公房に捧げる歌 その二：睡蓮... page54
14. 安部公房の変形能力5：リルケ2：岩田英哉... page56
15. もぐら感覚9：顔：タクランケ... page72
16. 安部公房と東鷹栖：森田庄一... page83

第8号 2013年4月30日発行

1. 表紙ニュース... page1
2. 目次... page4
3. 蜻蛉の夢：池田龍雄... page5
4. 安部公房と東鷹栖2～地域の人が語る安部公房～：森田庄一... page9
5. パフォーミング・アート・センター公演『友達』評：ホッタタカシ... page17
6. 夢の中にあられる安部公房1：滝口健一郎... page19
7. 『終りし道の標べに』真善美社版について：清末浩平... page20
8. 旭川訪問記2：編集部 タクランケ... page33
9. 二つの文学館を訪ねて：OKADA HIROSHI... page43

10. 『方舟さくら丸』小論：wlallen...page46
11. 安部公房の空間と時間(1)：OKADA HIROSHI...page49
12. 安部公房の変形能力6：リルケ3：岩田英哉...page57
13. もぐら感覚10：かいわれ大根：タクランケ...page68

第9号 2013年5月31日発行

1. 表紙ニュース...page1
2. 目次...page3
3. 「所有」について一坂口恭平『独立国家のつくりかた』：番場寛...page4
4. 『終りし道の標べに』をめぐるとエッセイ：花谷紫月...page7
5. 現実世界にあらわれる安部公房現象3：滝口健一郎...page13
6. ドナルド・キーン先生にお会いする：水島英己...page16
7. 5月19日『箱男』読書会レポート：清末浩平...page18
8. 『人間そっくり』小論：wlallen...page21
9. 興味尽きない公房さんのエピソード：hirokd267...page24
10. 私の本棚より：
 1. 『郷土誌あさひかわ』：wlallen...page28
 2. 『思想の不良たち』：清末浩平...page29
 3. 『安部公房とはだれか』：岡田裕志...page30
 4. 『砂の女』：岩田英哉...page32
11. 安部公房の空間と時間(2)：OKADA HIROSHI...page34
12. 安部公房の変形能力7：リルケ4：岩田英哉...page36
13. もぐら感覚11：自走するベッド：タクランケ...page47
14. 安部公房と東鷹栖3：資料・村史：森田庄一...page53

第10号 2013年6月30日発行

1. 表紙ニュース...page1
2. 目次...page3
3. 富士正晴さん安部公房を訪れるの記...page4
4. 安部公房 X 勅使河原宏：友田義行...page6
5. Final home (究極の家、終の棲家)：番場寛...page8
6. 安部公房が取り持つ出会い：奥村飛鳥...page12
7. 「私が私であること」について考える～安部公房『手』にそって：山本奈緒...page17
8. 『燃えつきた地図』小説/映画：滝口健一郎...page23
9. 安部公房という新種のシンククライムを根絶せよ：wlallen...page31
10. 笛井事務所による『棒になった男』のオーディションを見学して：岩田英哉...page33

11. 田中裕之先生の講演を聴いて：wlallen...page35
12. 滝口健一郎さんと編集部との往復メール...page39
13. 私の本棚より：
 1. 『震災後に読む文学』：wlallen...page45
 2. 『へるめす』：岡田裕志...page46
 3. 『100人の作家100人の字』：岩田英哉...page48
14. 質問箱...page50
15. 夢みる機械：ホッタタカシ...page54
16. 安部公房の空間と時間（3）：OKADA HIROSHI...page80
17. 安部公房の変形能力8：変形とは何か：岩田英哉...page85
18. もぐら感覚12：ひとさらい：タクランケ...page96

第11号 2013年7月31日発行

1. 表紙ニュース...page1
2. 目次...page3
3. 「安部公房の本」との出会い：滝口健一郎...page4
4. 私の本棚より：
 1. パンプ『ウエー』：岡田裕志...page6
5. 質問箱...page8
6. ポストコロニアル文学と安部公房を巡るある対話：OKADA HIROSHI...page10
7. 私と安部公房とインターネット：wlallen...page20
8. 滝口健一郎さんと編集部との往復メール...page23
9. 安部公房の変形能力9：ハイデッガー：岩田英哉...page27
10. もぐら感覚13：放蕩息子：タクランケ...page30
11. 花谷紫月さんの『安部公房「靴」』の連載中止について...page41

第12号 2013年8月31日発行

1. 表紙ニュース...page1
2. 目次...page4
3. 映画『砂の女』撮影秘話：池田龍雄...page5
4. 安部公房の小宇宙一『永久運動』：OKADA HIROSHI...page10
5. 安部公房の『永久運動』公演を演出して：松川華子...page14
6. 私の本棚より：
 1. 『安部公房全作品』全15巻：岡田裕志...page17
7. 質問箱...page19
8. 私と安部公房とインターネット（2）：wlallen...page22

9. 安部公房の変形能力10 : ドストエフスキー : 岩田英哉...page25
10. もぐら感覚14 : 夜 : タクランケ...page32

第13号 2013年9月30日発行

1. 表紙ニュース...page1
2. 目次...page3
3. 安部公房、映画に行く(2)ーアンドレ・カイヤットの「眼には眼を」 : 頭木弘樹...page4
4. 透明人間の告白 書評・『安部公房と私』山口果林 : ホッタタカシ...page18
5. 東鷹栖ゆかりの作家・安部公房作品朗読会報告 : 東鷹栖安部公房の会 澤井佳彦...page24
6. 『もぐら通信』 : 滝口健一郎...page25
7. 笛井事務所公演『棒になった男』の公開稽古を見る : 岩田英哉...page26
8. 『友達』と踊ろう! 劇評・CHAiROIPLIN公演『FRIEND』 : ホッタタカシ...page29
9. TAP読書会に参加して : 岩田英哉...page32
10. KAP読書会報告...page34
 1. 「関西安部公房オフ会」読書会報告 : 岡田裕志...page34
 2. 『箱男』のブリーフィング : wlallen...page35
 3. 安部公房読書会『箱男』速記録(部分)...page37
11. 私と安部公房とインターネット(3) : OAKDA HIROSHI...page53
12. 1984年と安部公房 : wlallen...page56
13. 私の本棚より
 1. 『安部公房全集030+』 : 岡田裕志...page58
14. 質問箱
15. 安部公房の変形能力11 : カフカ : 岩田英哉...page62
16. もぐら感覚15 : 便器 : タクランケ...page74

第14号 2013年10月31日発行

1. 表紙ニュース...page 1
2. 目次...page 3
3. 変身の恐怖 劇評・笛井事務所プロデュース公演『棒になった男』 : ホッタタカシ...page 4
4. 「棒になった男」上演後記 : 奥村飛鳥...page 7
5. 『さよなら アメリカ』 : wlallen...page 12
6. 『箱男』の都市論 : HIROSHI OKADA...page 16
7. 『私の本棚より』 : 『安部公房全集』 : 岡田裕志...page 20
8. 質問箱...page 23
9. 安部公房の変形能力13 : ルイス・キャロル : 岩田英哉...page 25

10. もぐら感覚 16 : 贗の父親 : タクランケ...page 41

第 15号 2013年11月30日発行

1. 表紙ニュース...page 1
2. 目次...page 5
3. 『一角獣の変身』における1963年の安部公房 : 秋川久紫...page 6
4. ドナルド・キーン様からのお葉書...page 10
5. 創作の秘密 : 滝口健一郎...page 11
6. 安部公房没後 20年記念講演会報告 : 澤井佳彦...page 13
7. 頭木弘樹様からのお返事 : 編集部...page 15
8. 安部公房『密会』論—絶望の書として— : 嵐志保...page 19
9. 『飢餓同盟』小論 : w1allen...page 35
10. 『けものたちは故郷をめざす』と表現者安部公房 : 稲垣健...page 38
11. 安部公房の愛の思想 (5) : HIROSHI OKADA...page 40
12. 『私の本棚より』 : 『石川淳対談集 夷齋座談』 : 岩田英哉...page 44
13. 質問箱...page 48
14. 安部公房の変形能力 13 : シュールレアリズム : 岩田英哉...page 49
15. もぐら感覚 17 : 笛 : タクランケ...page 67